

SONRISA

そんりさ

Vol.121



ペルー
先住民族の最近の動向

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|----|--------------------|-------------|
| 2 | セルバの声ーペルー・アマゾン地方 | : 柴田大輔 |
| 6 | ペルー・先住民政治の最近の動向 | : 岡田勇 |
| 14 | ボリビア便り その1 | : 藤田護 |
| 17 | 遺伝子組み換え食品の脅威 | : 翻訳ワークショップ |
| 24 | サパティスタ自治区の現在 | : 柴田修子 |
| 28 | ラ米百景「ニクソンとメディシの陰謀」 | : 伊高浩昭 |
| 32 | 音楽三昧♪ ペルーな日々 | : 水口良樹 |
| 34 | メキシコ食巡り | : ミゲル・アクーニャ |
| 35 | ニュースクリップ | |

「セルバの声ーペルー・アマゾン地方」

柴田大輔

「私はここで生まれた。だからここ死にたい」。焼畑の火入れを終え、熱くなった体を川で冷やしながらか、アワフン民族のアメリカコさんは話す。茶色く濁った水を湛えるマラニョン川が、セルバ（アマゾン熱帯雨林地帯）の木々を水面に写しながら流れていく。

二〇〇九年六月五日、ペルー・アマソナス州バグア市近郊で、幹線道路を封鎖するセルバに暮らすアワフン民族・ワンピ民族と軍・警官隊との間で激しい衝突が起きた。双方に数十人の死者、一〇〇人を超す負傷者を先住民族側に出すに至ったこの事件は、豊富な天然資源を有するセルバ地方開発を目的とした、政府による一方的な法令の制定に端を発する。自らの頭越しに進められていく資源開発に対し上げられた先住民族の怒りの声を、政府は力でねじ伏せようとしている。

1. セルバへの入り口

褐色の乾いた大地をひた走る幹線道路の先に、セルバへの入り口となるバグア市がある。同じアマソナス州にバグア・グランデ（大バグア）という町があることから、バグア・チカ（小バグア）と呼ばれている。乾季が終わろうとしている八月、今年は例年にも増して雨量が少なく、極端に乾いた町に強烈な太陽が照りつける。渴いた喉を潤そうと路上で豆乳を売るおばさんに声をかける。大きな氷を浮かべたバケツ一杯

の豆乳から、なみなみとコップに注いでくれる。一息に飲み干すと、さらにもう一杯注いでくれた。「それにしても暑いですね」と声を掛けると、「あら、すごく寒いでしょ」と茶目つ気のある笑顔が返ってくる。暖かい地域に暮らす人たちの和やかな空気が街の中に流れている。今回の抗議の中心となったアワフン民族・ワ



マラニョン川を行き交う船

ンピ民族は、町から望む山脈の反対側に広がるセルバ（アマゾン熱帯雨林地帯）で暮らしている。セルバでは一年を九月から十一月の雨季と、十二月から八月の乾季に分けられる。乾季でも週に何日か

雨が降り、その豊富な雨量が様々な生命が息づく熱帯雨林の源となっている。雨季には川幅が一〇〇メートルを超えるというマラニョン川が、いくつもの支流を湛え大きく蛇行しながら、後にアマゾン川へと名前を変えてゆく。

バグアからセルバへと一本の未舗装道路が走る。メスティソと先住民族が混在する町が道路沿いにいくつかある。その他大部分の地域に道路はなく、マラニョン川とその支流沿いに点在する四〇〇あまりのコミュニティで、およそ六万八〇〇〇人のアワフン民族・ワンピ民族が生活している。ここではベケベケと呼ばれるモーターを付けた木製のボートや手漕ぎのボートを移動手段にしている。

2. コミュニティーでの生活

ACID（アマソナス先住民族共同体開発協会）という組織で先住民族のための活動をしているアワフン民族のホセさんが、彼のお姉さんが住んでいるというアワフン民族コミュニティへと案内してくれた。ペケペケでマラニョン川を走る。ボートを降り森の中を歩くと、黒く焼けた地面を露にする焼かれたばかりの畑、たわわに房を実らすバナナ畑が現れる。この辺りでは焼畑で開いた畑にバナナ・カカオ・ユカ芋・パイヤ・マンゴーといった熱帯の作物を栽培している。特にカカオは数少ない現金収入を得るものとして力が注がれている。やがて小さな

沢を渡ると一〇軒ほどの家が立ち並ぶ集落に辿り着く。家々は、カーニャブラーバというサトウキビに似た植物を壁に、ジャリーナの木を葉を編み屋根にする。ここも含め多くのコミュニティは家族単位で集落を形成しているという。ホセさんのお姉さんの家に辿り着く。お姉さんは私の存在に初め戸惑っていたようだが、蒸かしたユカ芋と一口大に切り分けたサトウキビを皿に盛って差し出してくれた。久しぶりに会うという姉弟の周りに次第に人が集まる。アワフン語で話される彼らの会話は私には分からないが、その独特のリズムと時折はさまれる笑

い声はゆったりとした音楽のように聞こえた。

ほぼすべての人がスペイン語を話す、同民族の間では民族の言葉が話される。コミュニティに
限りにある。スペイン語を



アワフン民族コミュニティの朝

話す必要がなく、外に出る機会の少ないお年寄りは日常的に使うことがないようだ。ナサレというコミュニティで暮らす八九歳になる男性は、「私はあまりスペイン語が得意じゃなくてね」と言う。また、彼の父親の世代では全くスペイン語が使われなかったと言う。しかし子供、孫の世代となるとスペイン語とアワフン語をその場にに応じて使い分けている。

ゆっくりとした時間が流れている。広場では子供たちが完全に日が沈んでボールが見えなくなるまでサッカーをしている。日が沈むと、懐中電灯の光が路上を行き交う。このコミュニティには電気、ガスが来ていない。ここだけではなく、ほとんどのコミュニティも同じ状況だという。薪で熾した火で料理をし、懐中電灯・蠟燭の光が家の中で人を照らす。畑で作物を栽培し、豚・鶏を飼育し、川で魚を獲る。小さい雑貨店はあるものの、ほぼ自給自足の生活を送っている。アマソナス州政府が発行する観光案内はセルバを「雄大な自然」「伝統的な生活」と謳う。

しかし、そこには人々の日々の暮らしがある。ここで暮らす若い男性と話していると、「私たちには収入を得る手段がない」と言う。ここでもっとも多く栽培されているのがバナナだ。しかし、交通手段の限られるここには買い付け業者が定期的には来ない。数ヶ月来ないときもある。更に一〇〇本一ソル（一ドル＝約三ソル）

という安値で買い叩かれている。最も値段の良い力カオでも、一キロ四ソルだという。引き取り手のないバナナは自分たちで食べる以外捨てる。売りに行くにも、最も大きな町バグアまで船と車で半日近くかかる上、多量の物を運ぶ手段・費用がない。「とにかく作物を作っても売る相手がいない」と嘆く。多くの人が病氣・怪我をしても現金がないため、病院のある場所まで行くことがままならない。ニエバというセルバの町の病院で働いていたジャネさんは、毎日ボートで各コミュニティを巡回診療していた。しかし、病院に人手は足りず、十分な設備・薬もない。政府に支援を求めても全く無駄だった。コミュニティの男性は、「政府は私たちにこれまで何もしてこなかった。電気もガスもないこの状況を見れば分かるだろう。更に住む場所まで奪おうとしている」と声を荒げる。



軒先で火を起こすアワフン民族の女性

3. 先住民民族の蜂起

ペルー政府はこれまでセルバの住民に対してほとんど関心を払ってこなかった。その一方で石油・天然ガス等豊富な資源が眠るその地域に対して「国の発展」を掲げて開発を進める。「リマ（政府）にとって、ペルーとはリマ、リマこそがペルーなんだ」とACIDのホセさんは話す。いったい発展とは何なのか。

六月五日の事件は、ペルー政府が米国政府との自由貿易協定発効に向け数十の法令を公布したことに端を発する。先住民民族コミュニティの土地所有権、生活の場であるセルバの自然環境に非常な影響を及ぼす恐れのあるこれらの法令が、当事者である人々の頭越しに決められていく。これに対して二〇〇八年八月よりセルバ複数の州で先住民民族による抗議行動が始まった。一旦は非常事態宣言が出されるまでになるが、後、セルバ各州に暮らす先住民民族の全国組織であるAIDSEP（ペルーセルバ開発民族連合）の代表と国会の間で合意がなされ、数十の法令の中でもコミュニティ所有地の譲渡に関する法令一〇一五と一〇七三が撤廃され一応の収束を見た。

二〇〇九年に入り、AIDSEPは更に九つの法令の撤廃を要求する。二〇〇九年四月九日より再び、先住民民族による抗議行動が始まる。アマソナス州ではバグア市近郊の幹線道路が封鎖

された。

二ヶ月に及ぶ抗議行動にも政府による対応は進まなかった。そして六月五日を迎える。

4. 六月五日の衝突

事件後、「バグア悪魔のカーブ (Curva Diablo de Bagua)」と呼ばれるようになった現場は、マラニオン川と並行するように一直線に走る道路が、そこだけ小高い丘に沿ってS字にカーブを描く。乾燥しきった丘の斜面には二メートルほどの細木が点々と茶色の地面を露わに立っている。二〇〇〇人から多いときで四〇〇〇人もの人々が、二ヶ月間にわたってここに寝泊りをしていた。事件後二ヶ月がたった八月初旬、丘の斜面には当時使っていたと思われるプラスチック製の皿やフォークが散乱していた。川沿いの茂みには警官隊によって発砲さ



六月五日、現場の丘で腹部を銃弾が貫通した。二回の手術をおえ三回目の手術を待っているワンピ民族のサンチアゴさん。



6月5日の現場を訪れる被害者の遺族。事件から1月後、犠牲者を追悼するため、丘に十字架が立てられた。

れたガス弾・銃弾が今も散らばり、それを拾う人達の姿があった。

丘を望む場所に暮らす女性は、当日を振り返り、「丘の斜面や道路には沢山の人が横たわっていた。それが死体なのか怪我人なのかは分からないが、とにかく沢山の人がそこら中に横たわっていた。」と言っ。

またその日、道路脇で寝ていたサンチアゴさんは、早朝五時過ぎに騒がしい人の声で目を覚ました。すると丘の中腹で続けざまに銃声が

なった。逃げる人達が目に入る。彼自身も丘へと登った。そのときに腹部を銃弾が貫通し倒れた。丘には一〇〇〇位の人達が寝ていたと言った。

抗議行動が始まってからほぼ二ヶ月間そこに寝泊りしていたという女性も道路沿いに寝ていた。早朝五時半頃、丘の上のほうで銃声がなりだす。六時過ぎごろ上空にヘリコプターが飛んできて、そこから発砲してきた。しばらくすると幹線道路の両方向から警官隊が現れる。あたり一面に催涙ガスが立ち込め、銃声が響きわたる。「動物でも撃つようだった」と言う。

当時、アマソナス州セルバのペトロペルー第六石油施設を望むコミュニティ、クス・グランデには八〇〇〇人あまりの先住民族が集まっていた。バグアからの知らせを聞くと群衆が施設を警護していた警察官を襲い殺害する。

現地には六月五日から十日にかけて夜間外出禁止令が出される。幹線道路の交通の往来はあるものの、現場となった丘には警察が入り、その他一切の立ち入りが禁止された。

後に、政府による事件の調査結果が発表された。死者三四名（警察官二四名、先住民族一〇名）行方不明者、警察官一名。

しかし、いまだ相当数の人々がセルバのコミュニティに帰っていないとの報道もあり、先住民族側の死者・行方不明者に関しては、深い疑問がもたれている。

5. セルバの声

近年、三・四世代の間でアマソナスのセルバではスペイン語が行き渡ったという。それ以前の何十と言う世代を生きてきた人達から比べると大変な変化を意味するだろう。外との関りと言う必然性がなければ、ここまで普及することはなかったように思う。次々に持ち込まれる新しい価値観は日々の生活を変えていく。目に見えて加速していく変化の中で、土地の所有や民族の文化に対する意識など、個人・社会の葛藤はより深くなっている。それでも世界的な変化に比べればまだ緩やかなものかもしれない。しかし、そこへ今「資源の争奪」と言う人間の欲望をむき出しにした、現在の世界を覆っている価値観そのものが巨大な資本を伴って目の前に現れる。「世界」「国」というほんの一部の人間の持つあまりにも大きな力の前に、蠟燭を節約した暗がりの中で話される人々の悩みはあまりにもはかない。

生きるということに対する危機感から立ち上がった人々を政府は「テロリスト」と呼ぶ。中央のリマから遠く辺境に暮らす彼らの顔、声はこれまで「雄大な自然・伝統的な生活」と言った観光案内にあるイメージの内側にあり、リマに届くことがなかった。今そのイメージを引き裂いて現れた人々はリマに生きる人々と変わることはない同じ人間だ。しかし、国は憤り訴え

かける人間の顔・声に対して「動物に対するように」銃弾を浴びせた。そして「テロリスト」と言う言葉で、現れた彼らの姿を再び隠そうとする。

しかしそれを今、真に受ける人がいるのだろうか。

六月五日の映像はすぐさまインターネットで世界へ飛んだ。地元バグアではDVDとなって市場で売られている。ACDのホセさんは言う。「今回の事件で世界の目がセルバに向いた。こんな形によってだが、今までになかったことだ。」

天然資源というほぼ全ての人間にとって共通の問題を前に語られる「国」とは、「世界」とは誰を指すのか。「私たちだってペルー人だ」と言う人々の「ここで生まれた。だからここで死にたい」というささやかな願いは、強い光を持った世界を形作る一部分である。そう考えるのは理想的過ぎるのだろうか。

セルバの深い木々の間から人々の声が溢れ出した今、その声にどれだけの人達が耳を傾けられるのか。その声がより遠くへと響くほど、人間は新たな可能性を見出せるのではないか。

※小見出し3「先住民族の蜂起」で一連の経緯を、筑波大学大学院・岡田勇氏が、先住民族の一〇年市民連絡会発行『先住民族の一〇年 News』第百五十六号に寄稿された「ペルー先住民族のアマゾン蜂起」を参考に致しました。

レコム連続南米勉強会 第四回

「ペルーにおける先住民政治の最近の動向」から

二〇〇九年五月二三日、日本ラテンアメリカ協力ネットワーク、開発と権利のための行動センター、先住民族の一〇年市民連絡会の共催による南米連続勉強会の第四回は「ペルーにおける先住民政治の最近の動向」というテーマで筑波大学大学院博士課程の岡田勇さんに報告をして頂きました。概要をお伝えします。

二〇〇八年八月から、ペルーのアマゾン地域で先住民による抗議運動が起こっています。その動きはいったん収まったのですが、今年四月に入って再燃し、六月には死者を出す惨事に発展しました。今日はこのいわゆる「アマゾン蜂起」の話を取り上げたいのですが、ペルー全体についてもお話をさせていただきます。なお、アマゾン蜂起については、勉強会以後の展開についても加筆修正しました。

ペルーには多様な先住民がいるだけでなく、歴史のなかで扱いが変化してきました。現在でもペルーは国家や国民を作っていく途上であり、変化しつつあります。国家。国民を作るといっても、国家が法律や制度をつくるだけでなく、先住民運動、農民運動も参加した国家と社会の相互作用であると考えた方がいいでしょう。

う。アマゾン蜂起もその延長線上にあると考えられます。人々の運動や国家の政策がどのようなプロセスをたどり、それらがどのように積み上げられて現在に至っているのか、ということ为先住民政治として捉えていきたいと思えます。

●ペルーの概要

エクアドルからボリビアにかけて国土を南北に縦断するアンデス山脈の地域を一般にシエラ（山間部）と言います。その西側にある太平洋岸の地域をコスタ（海岸部）といい、首都リマやトゥルヒージョといった大都市が位置しています。そして国土の半分以上はアンデス山脈東斜面のセルバ（熱帯低地）といわれるアマゾン地帯となっています。ただ人口の分布で見ると、コスタが六〇%、シエラが三〇%、セルバが一〇から一五%となっています。

先住民の人口比率は二八から四五%という数字が出ています。基準によって異なるということです。二〇〇一年の統計によると、スペイン語以外の先住民言語を話す人、自分の祖父母までが先住民言語を話す人、あるいは自分は先住民だと自己定義する人、という人たちが先住民

に含まれます。三〇から四〇%の人が先住民と言えるとされています。

これらの人々は七〇強のエスニック集団・言語集団に分けられています。シエラにはケチュアとアイマラが存在しています。ケチュアは、ケチュア語という言語を話す人々で、四五〇万人ほどの人口がいます。最近ではグーグルでもケチュア語サイトが作られるほど広く知られ、ボリビアやエクアドルにもこの言語を話す人が多くいます。ただ地方の方言によって全然違うと言われますし、共通のケチュア民族意識が共有されているわけではありません。他にアイマラの人々も約五〇万人おり、ボリビアとの国境沿い、チチカカ湖周辺のプーノに住んでいます。セルバには約三五万人の先住民がいて、広大なアマゾン地域に分散して、六〇を超えるエスニック集団が存在するとされています。

シエラ、セルバの先住民共同体を法的に登記する政策が歴史的になされてきました。現在では、およそ五六六〇の登記された共同体があるとされています。

先住民が比較的多いのは、アプリアク、アヤクーチョ、クスコ、ワンカベリカ、プーノといった中央から南部にかけてのシエラの五州で、六〇から七〇%を越すケチュアやアイマラの先住民人口を抱えています。この五州を差別的な用語であるのですが、「Mancha India」、「先住民の染み」と呼ぶことがあります。

セルバについては、アマゾナス、ロレト、マドレ・デ・ディオス、ウカヤリに先住民が多いとされています。しかしアマゾナスにおいても一五%、マドレ・デ・ディオスでも二四%、ウカヤリでも一六%と多数を占めるには至っていません。

●ペルーと先住民についての歴史

植民地化とともにそれ以前からセルバやシエラに存在してきた多様な人々にたいして「インディオ」という呼称が押しつけられ、それに対する政治が行われてきました。シエラでは「インディオ」、セルバでは「ナティボ」と呼ばれたり、マルクス主義の思想家は「カンペシーノ（農民）」と考えてきました。そのため、政策や政治運動の目的、限界、可能性はこのような思想、政治イデオロギーに裏付けられてきたのです。様々な政治思想・イデオロギーがある中で、ペルー先住民の政策・運動が作られてきたのです。

国家形成

一六世紀にスペイン人のフランシスコ・ピサロらが到着し、植民地化が始まると、インカ帝国として知られたタワンティンスーヨ（四つの地方）が崩壊します。その後アシエンダと呼ばれる大土地領主が形成され、先住民が小作人として使われます。スペイン人が入ってきたことに

よって先住民共同体が崩壊して、先住民が労働力として農奴として使われます。そうした支配から逃れて先住民共同体を築いた例もあります。植民地政府に税や労役を提供する義務を負っていました。

一八世紀末には、先住民共同体のカシケ（首領）であったトゥパク・アマルによる大規模な反乱が起こります。このカシケという、教育も受け権威もあったエリートによる反乱以後、スペイン人たちは組織的・システマ的に先住民のエリートの存在を消そうとします。

一八二一年、トゥパク・アマルの反乱から半世紀も経たずに、ペルー副王領は独立戦争によって崩壊します。しかし独立後もアシエンダの小作人や先住民共同体に対しての支配は変わらず収税や労役といった負担は続きました。

インディヘニスモ

二〇世紀初頭にペルーに国民統合しなければならぬという思想が生まれます。当初は政治的な力をほとんど持たず、非先住民による先住民擁護の文学・芸術運動でした。しかしやがて、先住民を国民統合しなければならないという政治思想も生まれます。その背景には、一九世紀末にチリとのいわゆる太平洋戦争に敗北して、大きなダメージを受けたことがありました。なぜチリに大敗したのか。それは大多数を占めるインディオ＝先住民が国を守る意識を持たず、

強制的に闘わされたからである。また国家の近代化も遅れている。そう考える非先住民知識人が現れるようになったのです。

もう一つ、アシエンダ領主の政治的影響力の低下もありました。リマやコスタを中心として、経済自由化への志向が生まれつつありました。自由貿易主義者の中には、アシエンダの小作人を解放し、工場労働者のような自由化された労働力として使おうという見方もありました。

一九一九年から三〇年のアウグスト・レギア政権は、このようなインディヘニスモを政治的に利用しました。レギアは自由貿易主義者に近かったのですが、彼の政権下で初の先住民機関が設立され、先住民共同体も法的に承認されました。ただし、彼も先住民を自分への支持に利用しただけであったことが後に明らかになりました。

また一九二〇年代には、先住民擁護の左翼思想も生まれました。ホセ・カルロス・マリアテギは、インディヘニスモが、インディオについてのステレオタイプ、特に庇護が必要な人々というレッテルを作っていると批判します。インディオを国民としてどうするかという問題は、土地問題であると彼は主張します。封建制から解放するのは正しい。しかしインディオこそが新しいペルー国家を作る上での主軸にならなければならないと考えました。これを社会主義的な思想と混合させることで、農民階級の問題で

あると考える事になります。しかしマリアテギ自身も、先住民が自らを代表する能力はないので、非先住民が先住民を擁護する意味はあると留保していました。

マリアテギに近い考え方として、クスコを中心に活躍したルイス・バルカルセルがいます。バルカルセルは二言語教育を通じた先住民の自立的な代表を可能にする考え方を提言しました。

軍事政権による改革

マリアテギのもとで、後にペルー共産党となる政治運動が起きました。その影響下でシエラ南部を中心に農民組織が形成されます。一九四七年にはCCP（農民総連合）と呼ばれる全国規模の組合が形成されました。同時に一九四〇年代から六〇年代にアシエンダ領主の力が弱まり、農民運動との間に激しい衝突が起きます。農民はアシエンダに侵入し、植民地化以来収奪されてきた土地を取りかえそうとします。

一九六八年に始まるフアン・ベラスコ軍事政権は、彼らの要求を取り入れた国民統合政策を進めます。それは農民階級としての国民統合であったと言えるでしょう。一九六八年六月二四日、ベラスコは農地改革を開始しますが、彼はこの日をインディオの日と定め、「あなた方はもはやインディオではなく農民である。アシエン

ダの領主はあなたたちの貧困を食い物にすることはない」と宣言します。

ベラスコ革命は農地改革を行い、アシエンダ領主が駆逐され、先住民に土地が分配されました。しかし、一〇から一五%しか農地が分配されなかったこと、大規模所有の土地を分配したことで農地の小区画化が進んだこと、農業協同組合普及の試みが成功しなかったこと、改革はコスタ中心でシエラでは不十分だったことに対する批判があります。また定住生活を営まないセルバの先住民には有効ではありませんでした。

この時代に解決されなかった貧困や農業の問題によって、都市への大量移住が進みました。農地改革の裏側で、教育を通じて都市に移住し、個人の才覚で社会上昇していこうという別の動きが増しました。

センデロ・ルミノソ

一九八〇年に民主化された直後にセンデロ・ルミノソの問題が出てきます。センデロ・ルミノソは一九七〇年代にペルー共産党の毛沢東派によって結成されます。毛沢東派は農村で勢力を得て、都市を包囲しようと考えていました。アヤクーチヨ県の国立ワマンガ大学の哲学教授アビマエル・グスマンをカリスマ的リーダーとし、一九八〇年に田舎の投票所を襲い武装闘争を開始しました。センデロは狂信的かつ残忍な

戦術を取り、先住民共同体を破壊し、共同体の権威を虐殺し、彼らがリーダーにすぎ変わったのです。若者を挑発して武装闘争に参画させようとするもので、もはや先住民運動とは呼べません。一九八〇年代後半にはリマにも影響力をのばしました。

フェルナンド・ベラウンデ（一九八〇、八五）、アラン・ガルシア（一九八五、九〇）両政権は経済危機への対処に失敗し、センデロ対策にも失敗しました。一方、農民階級に支持を受けていた左派も分裂します。それまで組合運動や反政府運動で人々を動員していたのが、民主化によって選挙をたたかわなくてはいけなくなるのですが、選挙という闘争手段の変化に対応できなかつたのです。またセンデロのような武装闘争に傾く者もいました。左派は新しい政治思想を手に入れることもできず支持を失っていったのです。

フジモリスモ

一九八二年から一九八八年にかけて、インフレが始まるまでは完全雇用が五〇%以上だったのですが、その後のハイパーインフレで、不完全雇用が七〇%を超すこととなり、組合組織率が低下し、都市の貧民居住区やインフォーマル経済が拡大するという変化が起きました。こういった都市貧困層に対して、アルベルト・フジモリは、勤勉に努力すれば社会上昇できるとい

うアピールを行い、一九九〇年に大統領に当選しました。同時に階級政治の論理が崩れていきましました。

フジモリは、一九九二年に自主クーデタを行い、権威主義的手法で、二〇〇〇年まで政権を握ります。経済政策としてはインフレ対策、経済自由化、緊縮財政を進めます。これは不完全雇用が激しい中で、貧しい人の生活を直接改善するものではありませんでした。一方、新憲法で多文化多民族国家として規定するとともに、社会支出を二倍に増加させました。シエラやコスタでインフラ整備を行いました。このように、経済的には厳しく、社会政策では貧しい層にアピールするという実質的には矛盾する政策を行いました。

フジモリスモの継続

フジモリ退任後も、集権化された一九九三年憲法は改正されず、経済自由化路線が維持されました。

バレンティン・パニアグア政権（二〇〇〇から〇一年）では先住民との対話の契機が生まれました。中央セルバのアシヤニンカなどの先住民がセンデロとの闘いで被害を受けたことに対して、政府に保護と補償を求めて、二〇〇一年にリマまで陳情にきました。それを受けてパニアグア政権は、先住民の被害の規模や補償や社会支援が必要について対話をしましたが、一

年の暫定政権であったため問題は持ち越しになりました。

続くアレハンドロ・トレド政権（二〇〇一から〇六年）では大統領夫人であり、ベルギー生まれの人類学者であったエリアン・カープが先住民の開発に関心をもち、二〇〇一年一月に CONAPE（アンデス・アマゾン・アフロペルー人全国委員会）が設立されました。しかし世界銀行から先住民向けに供与される財源を私的に流用しているのではないかと、先住民組織を代表するものではない、といった批判を受け、二〇〇三年に解体されます。

ガルシア政権（二〇〇六年）下では別の組織に再編されましたが、代表に APR A 出身の元国会議員を据えるなど先住民を代表しているとは呼べない状況です。

歴史の総括

国民統合という点では、結果的に差別はなくなっています。教育でも格差が見られます。農村と都市の分断、不平等も続いています。シエラやセルバの農村から大都市に出て行く人が非常に増えています。一九七〇年代にはシエラの人口は六〇％でしたが、二〇〇〇年代にはいり、首都リマは人口の三分の一を抱え、コスタだけで六〇％以上の人口を抱えるという人口バランスの変化が起きています。

国家主導の先住民省庁の試みも失敗しまし

た。政権を支持させるために利用したり、国際援助資金を流用するために先住民省庁が作られているのではないかとという疑念もあります。また政府や議会との関係で、どのような権限を持っているのかはつきりせず、先住民の声が届かない組織となっています。

自律的な先住民運動の欠如も事実です。アマゾン蜂起で変わるかもしれないですが、次のような問題をクリアしなければなりません。

まず、先住民エリートを欠く階層社会の問題があります。トゥパク・アマルの反乱以降、先住民エリートは排除され、先住民と非先住民とのパトロンのクライアント関係が広く見られます。ベラスコ革命の農地改革によって土地問題の一部は解決され、奴隷的扱いはなくなりましたが、それで全てが解決したわけではありません。

センデロ・ルミノソによる恐怖の時代の影響もあります。政治活動をすればセンデロに殺される、センデロがない時でも軍からテロリストだと言われて殺される、逃げるしかないというような時代がありました。二〇〇〇年に入ってから、天然資源開発への環境汚染に反対すると、テロリストだ、共産主義者だ、センデロと同じだと言われることが頻繁にあります。また、道路でストライキをすれば「犯罪者だ」とされるなど、社会運動の「犯罪化」が進んでいます。

ひとつの動きとしては、北部シエラで家畜泥棒に対する先住民農民の自衛組織として始まり、後に全国に広まった農民自警団があります。カハマルカで一九七〇年代に初めて作られ、共同体が司法懲罰機能を担う考えが基礎にあります。一九八〇年代後半には共同体を自己防衛する権利が法的に認められました。また一九九一年にはショットガン一万丁が配られ、センデロの鎮圧に成果をあげました。セルバでもアシャインカ先住民が武装し、センデロとの戦いに加わりました。

都市への移住も増えリマの人口が急増しました。選挙の時にはリマが重要で、リマの得票で大統領になるか否かが左右されます。シエラやセルバの政治的重要性が低下したと言えるでしょう。シエラやセルバの利益を考える政治家、地方からの政治運動や社会運動を作っているという動きは、ペルーではほとんど見られません。二〇〇〇年以降にいくつかの動きが見られますが、政治的、社会的な不均衡は是正されていないと言えます。

●二〇〇〇年以降の先住民政治

天然資源開発の輸出経済に占める割合が一九九〇年代後半から急増しています。二〇〇一から〇八年の間に天然ガスの生産量はほぼ十倍になり、鉱工業製品の輸出額は全体の四〇～六〇％になっています。天然資源開発

に伴って環境紛争も増えています。また中央セルバのコカ栽培地域に勢力を残しているセンデロ・ルミノソとの間のコカ・コカイン問題もあります。

さらに隣国の影響として、ボリビアにおけるエボ・モラレス大統領の誕生が先住民運動の高まりに影響を与えています。いくつかの国際NGOの中にはペルーでも先住民運動を起こそうということを目指しているものもあります。

最近の政治勢力の中には、先住民の権利を主張するものが見られます。また、インカへの再興をうたうものもあれば、かつての左翼運動を再活性化しようとする動きもあります。他方で民主主義体制での政治参加を求める動きも強くなっています。二〇〇〇年以降の二つの重要な先住民組織と、それ以外の動きについて簡単に紹介しましょう。

AIDEESEP (ペルーアマゾンエスニック間開発連合)

AIDEESEPは一九八〇年にセルバ全体を統合する先住民組織として設立されました。セルバでの先住民の組織化は、一九六九年に米国のピースコアがアマエシヤのところで活動していましたが、セルバの先住民の問題を解決するための組織的手段がないということで、川の流域の複数の村の代表を連れてきて、問題点を話し合いますという一回目企画を行い、大成

功します。そこからアマエシヤ共同体会議が設立されました。

その後、多様なアマゾン先住民をまとめる試行錯誤が続けられました。汚職などの疑いから三回ほど分裂の危機もありました。その後分権化を進め、七つの地方支部が作られます。他方で、CONAPという別の組織への分裂もおきました。しかし、およそ三〇年にも渡って組織が続いてきたことは重要です。AIDEESEPはアマゾン蜂起の主役となります。

CONACAMI(全国鉱山被害共同体連盟) CONACAMIは一九九九年、ミゲル・パラシンによって設立されました。九〇年代後半から鉱山開発が進みますが、シエラの多くの地域には農民組合の地方支部が共同体があるだけの状況でした。

そうしたなか、パスコ州で鉱山開発のコンセクション拒否に成功したことから組織化が始まりました。パスコ州では二〇世紀前半から鉱山開発が進められ、フニン湖にはパスコの町で汚染された水が流れ込み湖全体が汚染されていました。このフニン湖畔の共同体にパラシンが住んでいたのですが、カナダの鉱山会社とその共同体でも開発をしたいと言いはじめたのです。憲法上、共同体の三分二が賛成しなければ鉱山開発はできない規定なので、パラシンは開発が始まる前に問題化して、侵入を阻止することに

成功しました。しかしこれは犯罪であるという告発があり、パラシンは政治犯としてパスコ共和国を脱出しました。その後カナダの先住民民族、First Nationとのやりとりがあり、カナダの企業に、カナダの先住民から圧力をかけることに成功しました。そこで国際的な圧力をかける組織を作らなければならないと一九九〇年に設立したのです。

二〇〇三年ころからは単に鉱山開発に反対するのではなく、先住民として多文化多民族国家に変えるため、憲法改正も含めた政治的な活動を行わなくてはいけないという方向に戦略転換し、二〇〇六年にペルー、ボリビア、エクアドル、チリ、アルゼンチン、コロンビアも含めたCAOI（アンデス先住民組織調整組織）を設立し、国際的な先住民会議を開催するなどしています。

その他の組織

CCP、CNAといった歴史的農民組合は左翼政党とのつながりが深く、政治をするのは政党、自分たちは農民組合ということで、政治参加の考えはもってきませんでした。最近ほCORNACAMIの主張に触発されて先住民の権利主張へと乗り出そうとしています、この動きは始まったばかりです。

オジャンタ・ウマラ

ウマラは元軍人のカリスマ的な政治家です。父のイザック・ウマラは旧左翼活動家でエトノ・カセリスモ (etnocacerismo) の提唱者でした。カセレス將軍というのは太平洋戦争の時に中央シエラで活躍した軍人で、チリに対する反撃を開始して、有利な講和条約を結ぶことに成功しました。そのカセレス將軍にちなんだ、ナシヨナリズムとインディヘニスモをあわせたのがエトノカセリスモです。弟のアンタウロは二〇〇四年、アンダワイラスでエトノ・カセリスタ蜂起をして入獄しています。

オジャンタ・ウマラは二〇〇五年、国民主義党 (PNP) を結成し、二〇〇六年にUPP (Union por el Peru) 党と連合して大統領選挙に参加し、一次投票で一位となったものの決選投票で落選しました。クスコやプーノといった先住民の多い県ではウマラは五七%あまり得票する一方で全国では三〇%でした。決選投票ではウマラ支持は同地域で七五%、全国では僅差で負けました。二〇〇六年選挙の際には、彼がペルーのエボ・モラレス、あるいはペルーのチャベスになるのではないかといわれました。

地方の政治化

トレド政権期から地方分権化が進んでいます。地方では先住民の政治家や政党が結成され、

市長や町長、地方議員に選出されています。しかし多くは先住民としてではなく、農民として政治参加をして、地方の政治的経済的な問題を解決したいという動きでした。

先住民の権利主張を掲げた政党の一つは二〇〇二年にアプリアク県アンダワイラスの地方農民組合による地方政治運動として結成されたリヤパンチク (Llapanchik) で、二〇〇六年の選挙キャンペーンにはボリビアからエボ・モラレスが応援にかけつけ、アプリアク州知事を輩出しています。

AIDSEPも一九九〇年代末にMIAPIという政党を組織しますが、あまり成果をあげてはいません。セルバの一部地域に限られています。

ボリビアとの国境沿い、チチカカ湖に面するアイマラ族が約半数を占めるプーノでは別の動きがありました。二〇〇六年の地方選挙でラジオのパーソナリティだったエルナン・フエンテスが州知事に当選しました。二〇〇八年九月にはケチュア・アイマラ連邦自治州宣言を行うなど、中央政府と対立姿勢を見せています。

●アマゾン蜂起

アマゾン蜂起の火種は、二〇〇七年一〇月にガルシア大統領がコメルシオ紙上で発表した「農場の番犬」論にあります。ガルシア大統領は経済自由化を進め、米国との自由貿易協定発

効作業を進めていました。彼は、セルバで先住民の権利主張を行っている環境保護主義者や社会活動家といった「番犬」たちが、自分たちでは野菜を食べないのに栽培も開発もさせず、だからセルバは自ら貧困に陥っているのだと批判しました。

AIDEEPは公開書簡を送ってすぐに反論しましたが、ガルシア大統領は二〇〇八年に入ると米国との自由貿易協定の締結のために数十の新しい法律を制定しました。

その中で、法令一〇一五と一〇七三は、先住民共同体の所有地の譲渡条件を緩和するものでした。先住民共同体の所有地は、ベラスコ政権下での農地改革以後、基本的に譲渡できないように憲法や法律で保護されていました。もう一つは、周知の国際労働機関（ILO）第169号条約において、先住民共同体の土地と資源に影響のある政策については事前に住民と協議する義務があるとされてきました。この二つの点で法令は争点となりました。

第一回蜂起

二〇〇八年八月から、ロレト、アマソナス、クスコ、ウカヤリといったセルバの諸州でアマゾン蜂起が始まりました。AIDEEPに所属する先住民たちが、石油精製施設の占拠、輸送船の拿捕、輸送道路・河川の封鎖といった直接行動に出たのです。一度は政府代表として環

境大臣がロレト州に赴きますが、交渉は決裂し、非常事態宣言が出され状況が悪化します。しかし国会とAIDEEP代表との間で合意がなされ、二法令が撤廃されたことで、犠牲者を生むことなく蜂起は撤収されました。

その後、国会の超党派委員会においてILO

委任立法令 概要

- 994 国家所有の荒廃地を農業活用するための灌漑計画への私的投資促進
- 995 農業銀行 AGROBANCO 再建 (relanzamiento) 法 (Ley 29064) の修正
- 1020 農業生産者の組織化と州政府における農業融資のための信託基金設立
- 1060 農業技術革新のための国家機関設立
- 1064 農業目的のための国家による土地活用に関する法整備
- 1080 種子法 (Ley General de Semillas 27262) の部分修正
- 1081 水資源の統合的管轄のための国家機関設立
- 1089 農業用地の所有権確定のための暫時的法体制設立
- 1090 森林と原生動物保全についての法律

(出所) 法律アーカイブ (www.congreso.gob.pe/ntley/) を参照し報告者作成

(注) 各委任立法令の概要については、主に「法の目的」項から報告者が判断したものであり、公的な法解釈に則ったものではない。

第一六九号条約の事前協議権をどのように具体化していくかについて議論が始まりました。表は、二〇〇九年初頭の時点でAIDEEPが再審議と撤廃を要請されていた法令です。

アマゾン蜂起についてひとつ明らかにしておきたいのは、セルバ先住民が天然資源開発に絶対反対なのではなく、そのやり方や紛争があるときの解決の仕方に問題があると考えていたということです。また、全てのセルバ先住民が一体的な組織を築いているわけではなく、戦闘的なものもあれば、妥協を受け入れるものもいます。ロレト、アマソナス州に多く居住するアワフンやワンピ先住民は、他の先住民と比べて好戦的だとされます。彼らが抗議運動の中でもっとも急進的な姿勢を示し、中心的な当事者でした。

第二回蜂起

二法令の撤廃から五ヶ月あまりが過ぎた二〇〇九年三月一三日、AIDEEPは他の法令撤廃について国会に要求書を提出しました。議論が進んでいるのか、撤廃の意志があるのかを問い、消極的ならば再度蜂起を行うとしました。これに対して三月二二日に政府は交渉委員会を設置しますが、AIDEEPはこれを懐柔策だと見て参加しませんでした。

四月九日から、再び、アマソナス州バグアと

ロレト州で河川・道路封鎖が開始されました。何度か、AIDEESEPと国会、政府との間で交渉を進める合意が結ばれかけました。しかし、AIDEESEPが交渉開始の大前提として法令撤廃の約束を求めたのに対し、政府と国会

は蜂起が継続している状態ではその約束はできないとしました。政府・国会側は、圧力をかければ話し合いが実現するという前例を作りたくないため、とりあえず蜂起を撤収した上で、改めて交渉を行うという姿勢でした。しかしAIDEESEP側は、蜂起を撤収したら法令撤廃の実現は難しくなると見ていました。互いへの信頼を欠いたまま、交渉は開始されることなく、AIDEESEPは蜂起を継続し、五月九日、蜂起地域に非常事態宣言が発令されました。

五月一九日、ようやく、野党のイニシアティブによって国会の憲法委員会が法令一〇九〇の撤廃を決定し、解決の糸口が見え始めました。同法令は国会総会での審議に委ねられる予定でしたが、国会審議を与党が無理やりに先送りしようとしたことから、暴力的な事件が起きてしまいました。

六月五日事件

アワフン・ワンピ先住民は、国会での審議延期を見て幹線道路の封鎖と石油施設の占拠を決定します。六月五日、AIDEESEP加盟の先住民組織ORPIANと警察、軍の特殊部隊と

の間で衝突が起きます。この結果、先住民側と警察側に合わせて三〇名を超える死者が出ます。これら地域には外出禁止令が発令され、多くの蜂起参加者が逮捕されました。

翌日から国際NGO、国際機関はペルー政府によるバグアでの「虐殺」を相次いで非難し、人権の保障を求めました。他方でペルー政府は社会騒擾の罪でAIDEESEP代表ピサンゴに逮捕状を出しました。ピサンゴはニカラグアに政治亡命します。

いったんは収束へ

アマソナス州に続いて、サン・マルティン州、クスコ州、マドレ・デ・ディオス州、さらにはシエラのアプリアマク州でも空港占拠と道路封鎖が起きました。六月一〇日に政府と国会は収束に向けて動き始めました。まず国会は、法令一〇六四と一〇九〇の効力の無期限停止を決定します。同日、政府は大統領決定によって法令撤廃や新たな法制などを含めた全権組織として「セルバ先住民の協調的開発のための調整部会」を設置しました。これは政府から四人、五人のセルバ州知事、一〇人のアマゾン先住民代表から構成される交渉委員会と言えます。

その後、イエウデ・シモン首相が道路封鎖を続ける中央セルバの先住民と会合をもち、事態収束に向けた合意を取り付けました。そして六月一七日午後、国会は審議の結果、法令

一〇六四と一〇九〇の撤廃を決定しました。同日夜、ガルシア大統領は法令の過ちを認め、首相の努力を評価しました。

最後に

アマゾン蜂起は、これまで重要な法律制定や紛争調停において、ペルー政府とセルバ先住民との間に信頼性、交渉制度、要求媒介制度が存在してこなかったことを赤裸々に物語っています。歴史を振り返れば多様な政治運動、政策、政治思想がありました。ペルーのすべての先住民を政治システムの中に包摂するものとはなっていない。問題は、アマゾン蜂起を通じて明らかとなったペルーの中の異なった利害、多様な人々の存在が、今後さらに対立的に衝突するのではないかという恐れです。同じ国の市民として、信頼感の醸成、様々なレベルでの意見交換、公平性と寛容を伴った交渉が可能になっただけでいいと考えています。

補論ですが、水、森林資源などの民営化が問題となりつつあります。二〇〇八年からの法改正の一部はこの問題を含んでいます。天然資源開発は、先住民をはじめとする人々の日常生活と国家の外貨獲得手段とが複雑に衝突する問題です。その中で先住民の権利をどう尊重していくかが注目されます。簡単な問題ではありません。ペルーの二一世紀の中心的課題と言えるでしょう。

ボリビア便りその1

藤田護 (ボリビア外務省外交アカデミー客員研究員)

1. はじめに

今年の五月の終わりから一年弱の予定でボリビアに滞在して、主にラパスとエルアルト市内で調査をしています。二〇〇三年の三月から二〇〇六年の二月までボリビアの日本大使館で専門調査員という仕事を三年間していたとき以来のボリビア滞在になります。

以前の滞在では、二〇〇〇年以降のボリビアでの社会運動の高まりとそれがもたらした国の政治アジェンダの変更を理解しようとするのが自分の仕事とも絡まった大きな課題でしたが(これはラテンアメリカの左旋回と呼ばれる動きの重要な一角を形成しています)、今回はアイマラ語で作成されるラジオドラマの調査を主にしています。これについて少し説明しておきましょう。前のボリビア滞在時から、仕事でも仕事以外の面でもボリビアの先住民運動、特にアイマラの先住民運動に関わるアイマラの人たちと関わる機会が沢山ありました。その中でも、アンデス口承歴史工房 (Taller de Historia Oral Andina, THOA) と呼ばれる組織に集まる、複数の世代にまたがる都市で大学教育を受けたア

イマラの人たちに暖かく受け入れてもらい続けていて、様々な活動に参加し続けてきました。先住民主義の思想を紡ぎ出そうとする組織の一角で、ただ単に外から来ただけの研究者としてだけではない形で自分の調査と思考を展開するには何がいろいろかというのは、前からの大きな課題でした。

その中で、THOAの一九八〇年代前半からの組織としての歴史の中で、アイマラ語のラジオドラマを作成するというのが初期の活動の大きな柱を成していることに気付きました。もちろんラジオドラマの作成に重要な役割を果たしたのはTHOAだけではないのですが(他にCIPCAという重要な農村開発に関わるNGOが存在します)、先住民運動の展開と併走する形で社会的に大きな役割を果たし、しかもアイマラ語による創作として文学的に重要な位置付けになるこのジャンルは、まだ誰も本格的に研究していないわりに、自分が関わってきた人たちの歴史を振り返るとともに、ボリビアにおける幾つもの重要な問題への貴重な入り口になるのではないかというのが僕の直観でした。

去年の夏に色々な人を訪ねてこの計画を打

診する中で、以前からもそして現在もアイマラ語でドラマを作成し続けているエルアルト市のラディオ・サン・ガブリエル (Radio San Gabriel) というアイマラ語のラジオ局の製作現場にも携わらせてもらうことになり、撮影補助のようなことをしながら、現場で何が起きているのかを体験しています。この話とも併せて、ボリビアで生活する中で調査の周りで考えている幾つかのことを綴っていきたいと思います。

2. アチャカチ市でのアイマラの新年

二〇〇九年六月二二日、朝の四時に真っ暗なラパス市内をバスで出発して約二時間、先はティキーナからチチカカ湖を渡りコパカバーナへと続く街道の途中で、ワリーナの分岐点を右に折れてアチャカチ市へ向かう。町に入る直前に小高い丘があつて、足元を確かめながら登っていくと、既に町のリーダーたちが集まっている。それ以外の町や組合からの代表団も、それぞれに集団をなして上ってくる。先頭にアイマラの旗ウィパラ (wiphala) (写真1参照) を掲げている人が多く、丘の頂上にこの旗が幾つもはためき始める。急に遠くから音がすると思つて視線を上げると、町のほうから二つの楽団が演奏をはじめて少しずつこちらに向かってくるのが見える。

楽団が到着すると東の空が少し明るくなる。ちよどいい時間に到着したみたいだ。アチャカチの町はイリヤンプーと呼ばれる高い山を臨む位置にあつて、その山に向かって少し右脇のほうから明るみが増して行く。中央のリーダー達は輪を作つて真中に焚き火を炊き、簡単な祈り詞を唱えているようだ。それが終わつていよいよ空が明るくなると、楽団がボリビア国歌を演奏する。その次にタワンティンスーユ(インカ)を主題とした曲が演奏されると、皆が両手を掲げて「初日の出」の光を浴びる(写真2参照)。



写真1 丘の上から wiphala と共にアチャカチ市を臨む

これは近年ボリビアで行事としての重要性を高めている、アイマラの新年 (Machaq Mara Aymara) と呼ばれているものだ (machaq は「新しい」、mara は「年」)。南半球のボリビアでは六月が冬至なので、ここを境に太陽が戻つてくるのでウイリユカクティ (Wilka Kuti) (wilka は「太陽」、kuti は「戻り」と呼ばれてくる)。もともとの中心地はティワナク市で、観光客も大勢押し寄せ、今年はそこにエボ・モラレス大統領も一瞬駆けつけることになっているという。今年は、直前になってこの日を国民の祝日とする大統領令が公布され、ラパス市内でも月の谷と呼ばれる観光スポットで行事が行われるらしい。そして、ここアチャカチでも昨年はごく小規模に行われたらしいこの行事が、今年は郡内の他の町からの代表団や、組合(ボリビア農民組合 CSUTCB や女性農民組合 Bartolina Sisa) の代表を集めて、大規模に行われることになったのである。現アチャカチ市長のエウヘニオ・ロハス (Eugenio Rojas) は、このような先住民運動を推進する重要な役割を果たしているようだ。

太陽が出ると、代表団の一人一人が祝いの言葉を述べて行く。アイマラ語のスピーチでは、最後に「00万歳!」と言うときに、「Jallalla XX(ハヤヤXX)」という風に言うのだが、そこで様々な人が言うのは、Jallalla Tupac Katari (トゥパク・カタリ)、Jallalla Bartolina Sisa (バ

写真2 「初日の出」を浴びる人々、後姿が見えるのが昨年建てられたというトゥパク・カタリの像



ルトリナ・シサ)、Jallalla Quillasuyu marka (トリヤスーユ・マルカ) Jallalla ponchos rojos (ポンチョス・ロホス) である。Jallalla Bolivia とは誰も言わなかった。) Quillasuyu とは、インカの支配した領域の中でボリビアに位置する地域を指す言葉で、高地部の先住民が自らの領域を指し示すときに演説や言論でよく見聞する言葉だ。そして ponchos rojos。町や地域や組合の代表達は皆が真っ赤なポンチョを身にまとっている。これはアチャカチ市が属する Quillasuyu 郡全域の服装として特徴付けられ、ここが歴史的にアイマラの人々の中でも特に戦闘的な地域であったことから、先住民側の軍隊のようなシンボルとして位置付けられている(元々は、革命を志向する教員が赤いジャケッ

ト (sacos rojos) を身にまとったところから始まったとも言われる。))

一通りの挨拶が終わると、皆が丘を下りて街の入り口にある平地に集合する。コカの葉がふるまわれ、大量のビールのケースが運び込まれ始める。観光客はいない。地元の代表団で大体二〇〇人くらい集まっているだろうか。僕はTHOAの人たちの代表を含めた何人かと来ているのだが、外務省の代表団のような形式でも現地入りしている。エボ・モラレス政権下で、ボリビア外務省の中の特に外交アカデミー (所長はエステバン・ティコナ (Esteban Ticona) というアイマラ出身の歴史家) は「民衆の外交 (diplomacia de los pueblos)」という方針を打ち出し、アンデス音楽の芸術家を海外に派遣するとともに、西洋の方式ではなくアンデス先住民の方式に根差した社交のあり方を積極的に捉えなおそうとしている。その中で、アイマラ出身の知識人たちの学校でありサークルのような存在として、先住民主義的な言論の形成に重要な役割を果たしてきたアンデス口承歴史工房 (Taller de Historia Oral Andina) というNGOがコースを設置し、その授業の一環として見学に来ていたのである。地元の若者グループがアンデス音楽を演奏し始めると、同じ若者グループの他の女の子たちがリーダー達を誘って踊りの輪ができ始め、雰囲気華やかになる。コカの葉を勧められ、様々な人からビールをどんど

ん勧められる。回りも少しずつ酔っ払いはじめるが、僕の左横の Bartolina Sisa (女性の農民組合) の郡代表の人は、示しがつかないと言って酔っ払いすぎないようにかなり気を付けている。右横のオマスーヨ郡担当の副県知事の人は、ゆっくりとアイマラ語で日本のことを質問してくれたり、ここの地域のことを説明してくれたりする。丘の上に像が一つ立っていたのは18世紀末の重要な先住民反乱を担った指導者トゥパク・カタリの像で、一年前に建てられたばかりだということ、その横に妻のバルトリナ・シサの像を建てようと計画していることなどを教えてくれる。踊りの輪が大きくなって、中で二人で組になり踊るペアも出てきた。

ビールのケースが一通り空になると、今度は食事だ。アプタピ (aputapi) と呼ばれる行事で、全員が少しずつ持ち寄って、そこから皆が手づかみで取って食べる形式だ。(アイマラ語で apata は「持つて行く」という意味の動詞で、この語幹に -tapi という「集める」という語感を持つ接尾辞がくっついたもの。) ジャガイモ、チューニヨ (ジャガイモを霜に当てた上で水分を踏み出したもの)、白トウモロコシ、チーズ、チチカカ湖のカラチと呼ばれる骨つばいが香ばしくて美味しい魚などがふるまわれる。

さて、このアイマラの新年は行事としての起りが比較的新しい…のですが、この話はまた長くなるので次回に。

特集 遺伝子組み換え作物の脅威

□種子は命

ノティシアス・アリアードス
訳：山本昭代

多国籍企業は地域の伝統的な種子を独占しようとするだけでなく、先祖代々維持されてきた種子の保存を違法なものとしようとしている。

ラテンアメリカでは、在来の種子の生産や保存、交配は、文化的にも社会的にもまた経済的にも、農民や先住民の共同体における重要な活動のひとつとなっている。このラテンアメリカ地域には、世界でも最大規模の生物多様性をもつ一七か国のうち八か国が属しているのである。

それらの豊かな多様性を誇るのが、ボリビア、ブラジル、コロンビア、コスタリカ、エクアドル、メキシコ、ペルー、ベネズエラの八か国で、そこには世界の七〇%の生物多様性と四五%の文化的多様性が集中している。

「われわれは多様な種子を、独占するためでなく、共有するために守るのです」。チリ農村・先住民女性全国連合 (ANAMURI) の会長、フランシスカ・ロドリゲスはこう述べる。

「在来の種子を守ることは、生命、土地、領域、

文化を守ることにつながる」。これは、コロンビア・エクアドル・ニカラグアで展開している「アイデンティティとしての種子」キャンペーンの主張のひとつである。

このキャンペーンのように、ラテンアメリカにおいては、遺伝子操作や遺伝子組み換えされた種子や食糧が増加してくるなか、農民・先住民共同体が展開するキャンペーンは多数にある。それら遺伝子操作された種子を独占するのは、播種からその商品化まで、食糧関連の一連の事業すべてを支配しようとする一握りの多国籍企業である。

「ペルーは、全世界のノアの箱舟だといえる。実際、ペルーほどの並外れた多様性をもっている国はない。わが国には三〇〇〇種類のキヌア、三五〇〇種類のジャガイモがある。その多様性を維持することは重要である」。サチャ・バリオスは、『遺伝子組み換え作物、何が問題か』というドキュメンタリーの中でこのように指摘している。

「遺伝子組み換え作物に関して問題となっているのは、わが国が農業に関して主体性を失い、外国の農業システムと、種子や農薬を我々に売る海外の多国籍企業に従属する国となってしまう

うということである」。バリオスは、ペルーにおいて生物安全性に関する規制が懸案となっているなか、このように述べた。

▽遺伝子組み換えモデル

遺伝子組み換え作物を擁護する人々は、これらの作物や食糧が世界の食糧不足問題を軽減するための戦略のひとつとなるのだという。だがその主張は、飢餓の問題は技術力で解決できるものではなく、社会正義と不平等の解消によってしか解決はできないと批判されている。

一三年前、遺伝子組み換え作物の栽培がアメリカ合衆国において本格的に開始された。今日、世界中で、大豆、トウモロコシ、綿花、アブラナの四種類の作物だけが、遺伝子組み換え作物の作付け面積の一〇〇%が実際に確認されている、と国際NGOであるフレンズオブアースは指摘する。これらの作物は、例えば Monsanto社によって開発されたトウモロコシ Mon 八一〇やシンジェンタ社によって開発されたトウモロコシ Bt11 のように、除草剤に耐性を持ち、害虫に抵抗力をもつよう遺伝子操作されたものである。

世界中で商品化されているすべての遺伝子操作された品種の約九〇%は、世界最大のバイオ企業モンサントの特許によるものである。

ほかにアヴェンティス、シンジェンタ、BASF、デュポン、ダウの五社があり、これらが

モンサントとともに遺伝子組み換え作物種子の世界市場を独占している。これら組み換え作物の種子は特許が取得されており、そのため農民は作付けのたびに企業に使用料を払わなくてはならない。もし支払わなければ、違法にその商品を使用したとして告訴されるのである。

「企業がある植物の遺伝子をひとつ組み換えただけで、それを自らの発明として所有権を主張できると考えるなどというのは、とんでもないことだ。遺伝子操作されているその植物自体、世界中の農民達によって何千年もかけて注意深く選別され、改良されてきた結果であるのだから」。ルーク・アンダーソンは、二〇〇二年に「農業使用に反対するオールタナティブ行動ネットワーク」によって出版された自著『遺伝子組み換え作物——遺伝子工学、食糧、われわれの環境』の中でそう指摘している。

大豆は、ラテンアメリカにもっとも大規模に導入された遺伝子組み換え作物である。ブラジルで生産される大豆の三〇%以上は遺伝子組み換えされたものであり、さらにパラグアイでは八〇%、そしてアルゼンチンでは一〇〇%近くが遺伝子組み換え品種となっている。

大豆はおもに飼料用として輸出市場向けに生産されており、貧しい人々の食糧にはならない。パラグアイでは大豆の総生産量の六五%が輸出され、ブラジルでは七二・四%、アルゼンチンでは九二%が輸出用であるとフレンドズオブア

スは指摘している。

▽破滅的な結果

遺伝子組み換え作物はごくわずかな人手しか必要としない。その結果、零細農家は追い出され、土地は少数の手に集約されることになる。

例えばウルグアイでは、このような企業化された農業形態の進出により、一日当たり五五人が農村から都市に移住を余儀なくされている。今日ウルグアイ人口のわずか一%が耕作可能な土地の八〇%を所有している。

さらに遺伝子組み換え作物の栽培は、より多量の殺虫剤を必要とするにもかかわらず、収穫量は在来種と同程度かときにはそれより低いことさえあるのが現状だ。例えばブラジルにおいては、大豆RRは、伝統的な品種ほどには高温や早魃に耐性がないことが確認された。

特定の除草剤に耐性をもつ遺伝子組み換え種子を生産する企業は、その品種が必要とする除草剤も売っている。そのため、農家はその多国籍企業に大きく依存することになる。

さらに、害虫に耐性をもつ遺伝子組み換え作物を継続的に栽培した結果、害虫自体が抵抗力をもつようになってきた。このような事態に対してバイオテクノロジー産業はもっぱら、「従来種よりもより毒性の強いタンパク質を組み込んだ新しい遺伝子組み換え品種を作り出す」ことによって対応してきたと、サンティアゴ・デ

コンポステラ大学のイベロアメリカ問題研究者、ホセ・ガルシア・メネンデスはメキシコの雑誌『コムルシオ・エステリオール』に掲載された記事の中で述べている。

「伝統的な品種は、進化したスーパー雑草やスーパー害虫には打ち勝てないであろうから、大生産者らはますます強い立場に立つことになる。それによって商品を大幅に値上げすることも可能になる」とガルシア・メネンデスは指摘する。

伝統的品種に対する大きな脅威となっているのは、遺伝子組み換え作物から非組み換え作物への受粉によって起こる遺伝子汚染である。このような汚染が起こると取り返しがつかない。つまり、いったん伝統作物が汚染されると、それは組み換え作物になってしまうのである。

グリーンピース・インターナショナルが行っている遺伝子組み換え汚染調査によると、一九九六年から二〇〇七年の間に、二一六件の遺伝子操作された作物による遺伝子汚染や、違法栽培や違法な流出があった。二〇〇七年だけで二八件の遺伝子汚染が報告されており、その内訳は、食糧一九件、食品七件、種子二件となっている。二〇〇七年に報告された一一件の組み換え作物の違法な流出のうち、二件はラテンアメリカで起こったもので、メキシコにおいて組み換えトウモロコシが違法に栽培され、また商業的栽培が認められていないペルーでも組み換

えトウモロコシが発見された。

「遺伝子組み換え作物を他の作物から隔離して栽培しようといくら努力しても、汚染を防ぐことはまず不可能だ。いかに真剣に取り組み、品質管理を徹底して行っても無理なのだ」とグリーンピース・インターナショナルは指摘する。

遺伝子組み換え作物にはまた、人に健康被害を及ぼす可能性もある。別の生物の遺伝子を組み入れることは、アレルギーやほかの病気を起こす可能性のある新しいタンパク質を作り出すことになる。

「例えば、パイオニア・ハイブリッド・インターナショナル社は、大豆のタンパク質を改良する目的でブラジルナッツの遺伝子を大豆に組み込んだ。ネブラスカ大学の研究者らは、この大豆をブラジルナッツにアレルギーを持つ人の血漿のサンプルで検査を行ったが、その結果、もしそのような人たちがこの大豆を口にしたら、アレルギー反応を起こし、それによって致命的な結果さえ起こしえることがわかった」と、アンダーソンはその著書の中で、スコットランド穀物調査機関の報告を引用して述べている。

遺伝子組み換え作物と組み合わせられる農薬もまた、人体に深刻な健康被害をもたらす可能性がある。モンサントが製造する除草剤ラウンドアップ・レディの主成分であるグリフォサートは、ガンを発生させる危険性を高めることが研

究によって明らかにされている。組み換え作物が人の健康や環境に与える影響に関しては予測のつかないものが多く、それに関しては今後の研究を待たねばならない。だがそれまでの間、各国政府の社会的責任としては、もし人の何らかの行為に付随して起こる危険性を予防することができないならば、その行為は禁止されるべきだとした一九九八年の「予防原則」を適用することであろう。この場合、それは組み換え作物の環境への流出と食用としての利用の禁止を意味することになるだろう。

▽組み換え作物の代替となるもの

食糧の供給源を主体的にコントロールし、決定権をもつことは、それぞれの民族のもつ権利であり、種子に関しても、土地や水に関する権利と同様、基本的な権利である。遺伝子組み換え作物は、生物多様性とこの食糧供給に関する主権に対する深刻な脅威である。

そのため、ラテンアメリカ地域の農民・先住民団体及び環境団体や指導者らは、有機農業としての認証を受けずに、これまでどおりの伝統的な有機農業を促進することに力を注ぐべきだと提案している。そこでは、地元での種子の交配や、在来種の改良や、伝統的な知識が継承されているのである。

有機農業や環境にやさしい農業は、栽培品種の多様性を促進し、それは農業システムを人々

が主体的にコントロールすることにつながる。認証なしの有機農業を推進すべきだという提案の背景には、バイオ企業がすでに有機農業を有望な事業と見なしており、それをコントロールしたいがために種子の認証制度を推進しているという現状がある。有機農業の種子の規制は、多様性の拡大を阻止するものだと農民・先住民団体らは主張している。

在来種を保護する目的とともに、組み換え作物栽培を許可しないと宣言する地域や国もまた増えている。

ペルーの環境庁長官、アントニオ・ブラック・エッグは昨年九月、ペルー国内で組み換え作物導入を禁止する可能性を極めて前向きに検討すると表明した。さらにブラックは地元メディアに対して、ペルーは一億六千万ドルの有機農産物を輸出しているが、それは組み換え作物が入ることで危機に瀕する可能性がある」と述べた。

食糧主権の防衛を訴える団体もまた、在来種子の地元での品評会や小規模な市場、近郊農業、生産物の交換などの強化や推進を訴えている。さらに、先住民団体における在来種子の継承のネットワークを支援することも提案している。

□メキシコ

カレン・トレホ（メキシコシティ）
訳・杉本 唯史

▽危険にさらされる土着のトウモロコシ
遺伝子組換えトウモロコシ（以下GMトウモロコシ）の輸入、商品化、実験栽培は、トウモロコシの遺伝的多様性をおびやかす。GMトウモロコシが在来品種に對し及ぼしうる影響ゆえに、メキシコにおいて長年にわたり論争を引き起こしてきた。

メキシコには五九種のトウモロコシが存在する。それは多くのメキシコ人にとって文化的、象徴的、精神的に重要な価値を有しており、それゆえにGMトウモロコシの国内流入はメキシコ農村とその生物多様性に深刻な打撃を与えることになる、というように受け取られている。

CCA（メキシコ、米国、カナダが一九九四年に設立した北米環境協力委員会）が二〇〇四年に実施した調査研究「トウモロコシと生物多様性・メキシコにおける遺伝子組換えトウモロコシの影響」によれば、とりわけ懸念されるのは、メキシコにおいてトウモロコシの伝統農業が社会的・経済的に重要なだけでなく、メキシコがトウモロコシの原産地の一つでありそのメキシコにおいて多様なトウモロコシを失うことは全世界においてそれを失うことを意味す

るからである。

メキシコ政府はこの件についての調査研究を後援してきたが、その結果は広く知られてはいない。しかしながら別の研究は、メキシコにおいてトウモロコシのいくつかの在来品種に組換え遺伝子が導入されていることを示している。

二〇〇一年一月、オアハカ州においてトウモロコシ土着品種の遺伝子組換え汚染が発見されたことが『ネーチャー』誌に発表された。これはGMトウモロコシの監視も規制もない実験栽培に関する最初の情報であり、栽培認可の付与と見直しに関する仕組みを定めた「遺伝子組換えに関する生物安全法」（二〇〇五年可決）第六九条によればメキシコでは認められていない。

環境団体グリーンピースがメキシコで二〇〇七年二月まで実施した監視活動によると、GMトウモロコシはミチョアカン、シナロア、メキシコシティ、タマウリパス、チワワの農村地域に存在することが分かった。

ミチョアカン州はそこで栽培されるトウモロコシの種の純粋性ゆえにメキシコ中部の農業的中心地と考えられているのだが、同州ではおそらく、米国にいる移民家族から送られてきた種子を知らずに地域で栽培した事例があったのだろう、とレルマ農村生産協会のメンバー、ロベルト・ドゥアルテは言う。

しかし「遺伝子組換え組織の生物安全性に関

する省庁間委員会（CIBIOGEM）」科学審議会調整員アレハンドロ・エスピノサは、米国南部に拠点を置くパイオニア、デュポン、モンサントといった多国籍企業が、メキシコ北部における農産物輸出州シナロアで生産者にGMトウモロコシを販売している事例があると批判する。

CCAの報告書は、米国で栽培されるGMトウモロコシの割合に基づき、メキシコに輸入される米国産トウモロコシは二五%〜三〇%が遺伝子組換えであると推定している。米国製GMトウモロコシの二品種は、⁽¹⁾ある種の幼虫に耐性のある組換え遺伝子Bt⁽²⁾ある種の除草剤に耐性のある組換え遺伝子、という遺伝子操作の二つの特徴を有する。

▽重大な警告

CCAの調査によれば、GMトウモロコシの既存品種の特徴の遺伝子移入が北米三カ国において健康あるいは環境に重大な害を引き起こしているという証拠は今のところないが、この問題はメキシコの生態系というコンテキストでは調査されていないという。

そのために「メキシコのトウモロコシの遺伝的多様性への影響は、北米全域および世界の他の地域におけるトウモロコシの多様性と生態系に直接的な影響を持ちうる。さらに汚染遺伝子は疑いなくメキシコの生物多様性に大きな影響を与えるだろう。汚染遺伝子の一つは殺虫剤（毒

素 Bt) の性質を示すが、これは米国に通常存在する対象害虫以外の虫にも影響があることが知られている」という警告を発している。

二〇〇七年二月時点で、環境保護組織メキシコ・グリーンピースの監視で収集されたデータは、その起こりうる事態には言及していないが、シナロア州の農場で組換え遺伝子 *npII*、*Cry1Ab*、およびメキシコシロシティで *EPSPs*、*Cry1Ab*、*Cry9C* が存在していることを指摘する。

▽論議

「遺伝子組換えに関する生物安全法」は、遺伝子組換えの商品化と輸出入、および研究目的の実験自由化を規制監視するために制定された。

その法案可決から三年後の二〇〇八年三月、CIBIOGEN 審議会の署名がなのまま同法の施行規則が連邦政府官報に掲載された、とエスピノサは批判する。

この動きに対してグリーンピースや「環境調査グループ」など環境保護組織はすでに、同規則に反対する憲法的論議を提起することを計画している。主な主張は、同規則がメキシコにおける GM トウモロコシの栽培に関して生物安全性の枠組を考慮しておらず「したがって GM トウモロコシ自由化への道は依然閉ざされていない」とメキシコ・グリーンピースの「遺伝子

組換えと持続可能な農業キャンペーン」調整員アレイダ・ラウは電話取材で述べている。

共同声明においてこれら環境組織は、「遺伝子組換えに関する生物安全法」第 8 章第二条の規定に基づく「在来トウモロコシを保護するための予防原則が確立されておらず連邦政府は法に反して遺伝子組換えの栽培を承認しようとしている」と断言する。

同規定は、「GM の生物安全性に関する国家政策と原則およびその適用施策を定義する」ことを求めている。

一方、「生命の種子」は公開書簡キャンペーンにおいて、「メキシコ家族の健康、収穫物の種子の自由な利用に対する自律性を保持する民族の権利、そしてトウモロコシに依拠した五千年間にわたるメキシコの発展は、この問題に関して慎重に行動すべきだという十分な理由である」と主張する。

「生命の種子」は、「遺伝子組換えに関する生物安全法」の完全履行だけでなく CCA が二〇〇一年に定めたメキシコにおける GM トウモロコシの実験栽培の一時停止を要求している。

グリーンピースは二〇〇七年二月二八日に発表したメキシコにおける GM トウモロコシの栽培拡大についての評価の中で、多国籍企業の活動と、在来種子の遺伝子財産および農民と消費者の安全性を保護する政治的合意の欠如とともに

に、組換え遺伝子を持つトウモロコシの生産を促す第三の要因は、一四年前の北米自由貿易協定 (TLCAN、英語略称 NAFTA) へのメキシコの参加だったと指摘する。

▽オルタナティブ

CCA はその環境保護基準に基づき、健康と環境への影響が調査研究で確認されない間は、メキシコにおける GM トウモロコシの規制なき商業栽培に対する一時停止措置を維持強化すること、また GM トウモロコシの輸入を削減監視することを二〇〇四年の報告書においてカナダ、米国、メキシコに対し勧告した。

また同報告書では、消費者が食べるものを選択する権利を行使できるよう、企業が組換え遺伝子の原産地を示す説明書きを有する生産物をラベル表示すること、遺伝子組換えを含有する可能性のある種子を栽培せずまた米国その他 GM トウモロコシが栽培される国から持ち込まれた種子を植えないように農民向け教育プログラムを通してより多くの情報を普及することを提案している。

だが、遺憾なことにメキシコではこれらの提案は有効な形では実現していない。

□ブラジル

ホセ・ペドロ・マルティンス(サンパウロ)

訳：松枝 愛

▽遺伝子組み換えの爆発的進展

社会的批判にも拘らず遺伝子組み換え作物を促進するルラ政権

ブラジルは以前から遺伝子組換作物(GM: Genetically Modified、以下GM作物)を耕作する世界的主要地域となっている。ブラジル社会ではこれを疑問視する動きが高まっているものの、遺伝子組み換えにおける大きな進展はルイス・イナシオ・ルラ・シルバ現政権下に起こっている。

非営利組織ISAIA(国際アグリバイオ事業団)によると、ブラジル国内のGM作物作付面積は二〇〇七年には一五〇〇万ヘクタールだったものの、二〇〇八年末までにはその面積が拡張したことによって、これまでアルゼンチンが占めていた世界第二位の座をブラジルが取って代わるとみられている。

世界第一位には引き続き米国が留まっており、二〇〇七年の五七七〇万ヘクタールという数字は、全世界におけるGM作物作付総面積のほぼ半分を占めている。

しかしながら、二〇〇六年から二〇〇七年にかけてのブラジル国内でのGM作物作付面積増加

率は米国より高い。米国での同増加面積は三一〇万ヘクタールにとどまっているが、ブラジルでは新たに三五〇万ヘクタールのGM作物農作地が作られ、三〇%の伸びを示している。ただしブラジルにおけるこれら農作地の増加率は、インドの同年比よりは下回っている。ISAIAによると、インドのGM作物作付面積は三八〇万ヘクタールから六二〇万ヘクタールに増え、実に六三%の伸びを示した。

▽野放しになった遺伝子組換

ブラジルにおけるGM作物の伸張は、ルラ政権の肝いりで行われており、国内におけるGM作物の商品化のほとんどが許可された。最初の商品化は、一九九八年九月、多国籍企業モンサント社の遺伝子組換大豆で、当時はまだフェルナンド・エンリケ・カルドソ政権下(在任期間一九九四―二〇〇二年)であった。その他の商品化はカルドソ政権の後を引継いだルラ政権下、バイオ保全技術委員会(CTNBio)がより強い権力を与えられて以来相次いだ。

CTNBioはマリナ・シルバ上院議員の環境相在任期間中(二〇〇三―〇八年)、新たなGM作物の商品化に対する強い抵抗運動の舞台とした。CTNBio内の環境省代表者たちは、大臣の支援のもと一般的にGM作物に反対していたが、CTNBioが度重なる再編を経てから、新たなGM作物の認可数は上昇した。二〇〇八年だ

けでも一〇年間活動歴のあるCTNBioによって授与されたGM作物ライセンス一二のうち七つが登録されている。

「ブラジル国民の健康や環境が危惧される形でCTNBioは遺伝子組換を商品化してきた」。生物学者モヘメド・ハビブ氏は訴える。同氏は州立カンピーナス大学の地域社会問題エクステンションで副所長を務める、OGM自由化を批判する国内の急先鋒の一人だ。

CTNBioが初めて再編されたのは〇七年三月で、遺伝子組換自由化に関わる委員の定員が一八名から一四名に削減された。

〇七年一〇月、ブラジルの厚生省にあたる機関ANVISA及び環境省と密接したブラジル持続可能天然資源環境研究所(IBAMA)は、各大臣で組織された国家生物学的安全評議会に対して、遺伝子組換とうもろこしMON810の商品化に動議を出した。

同作物の動議で、IBAMAは次のように述べた。「米国、スペイン、アルゼンチンなど遺伝子組換とうもろこしが商品化された国々では、GM作物による在来作物が汚染され、社会的紛争や商業問題が起きた。分離措置や特定化、効果的な措置の欠如は、GM作物による在来種、固有種の汚染につながった」。

〇八年二月、同評議会はこの動議を論議した結果、MON810遺伝子組換とうもろこしの商品化を認めると採決した。

▽生物多様性と健康への懸念

代替的農業計画諮問機関 (ASPTA) によつて、とうもろこし MON810 の「一〇の問題」が示された。その中の事実のひとつには、「この（作物の）商品化がブラジルの生態系に及ぼしうる潜在的危険を特定する環境調査は行われなかった」ことが挙げられた。

この点を、生物学者ハビブ氏はこう指摘する。「ブラジル政府と CTNBio は、世界中の科学者と環境活動家が主張している予防策を採っていない」。

「以前は農業が農業問題を解決するとされたが、今日それは有害であると認識されているように、（今のブラジルが）進んでいる道は間違いだ。しかも遺伝子組換をするに伴い、農業の使用が増えている。これは推進派の主張と正反対だ」とハビブ氏は補足した。

IBAMA の統計によると、遺伝子組換大豆に散布された農薬グリフォサトの構成物質の消費量は、二〇〇〇年から〇四年までに、ブラジル国内で九五%増加した。リオ・グランデ・ド・スール州は遺伝子組換大豆の作付面積が最も大きな伸びを示した地域で、同期間における大豆の作付面積は七一%の増加を示している。グリフォサトの消費は一六二%も増加し、作付面積は三八%増加した。

〇八年五月一三日、シルバ上院議員は環境省

を去った。すると間もなくして、GM作物商品化に反対したことが辞任に関連しているといった憶測が流れた。

前大臣がその職を辞した同日、ルラ政府はドイツのボンで開かれたカルタヘナ協定の第四回会合においてブラジルの六つの市民団体から批難を受けていた。グリーンピース、AS-PTA、権利の大地、有機農業協会 (AOJ)、ブラジル消費者防衛機関 (DEIC)、国立小規模農業者協会 (ANPA) は連名で作成した文書で、ルラ政権はブラジルの生物多様性及び人間の健康に及ぼす危険を回避するためのカルタヘナ協定を遵守していないと主張していた。

シルバ前大臣が辞任した翌月の〇八年六月、生物学的安全評議会は新しい多様の遺伝子組換とうもろこしの自由化に反対する新たな論拠を議論するため再び会合を持った。それは、以来 CTNBio が新たな GM 作物の自由化の可能性に関する技術的条件を評価する全権を担うことを決定した会合だった。すぐにバイヤー・クロツプサイエンス社のリバティールンクの綿花と、シンジェンタ社及びモンサント社のとうもろこしの商品化が認可された。これらは総て GM 作物だ。

遺伝子組換推進派も議会に擁護者を配している。

〇八年一〇月一六日、くしくも世界の食糧の日に於いて、ルイス・カルロス・エインゼ下院

議員は、ブラジルで遺伝子組換された原材料表示をめぐる現在の規制を変更する修正案を国会に提出した。

政令四六八〇／〇三では、遺伝子組換された原材料が一%を超える製品は、ラベルにその情報を記載しなければならないと定められている。黄色の三角形の真ん中に書かれた T の字のマークは、遺伝子組換原材料を意味する。

エインゼ議員の提出した修正案は、この T 字マークの削除に加えてラベル記載法の修正も含まれている。そして同議員はブラジルで最大の遺伝子組換大豆作付面積を有するリオ・グランデ・ド・スール州選出の議員だ。

「サパティスタ自治区の現在—ママ・コラル集會に参加して」

柴田修子

一九九四年にサパティスタ民族解放軍がメキシコチアパス州で武装蜂起してから一五年。いまではほとんど報道されることがなく、メキシコにおいてすら忘れられつつあるという声もある。しかし彼らはいまも抵抗生活が続け、民主主義とはなにか、人々に開かれた政治空間とはどのようなものか問い続けている。本稿では、そんなサパティスタたちの現在の姿を、三月に行われた「ママ・コラル集會」の報告を中心に伝えたい。また、最後に自治区への行き方を紹介する。

1. 自治区の現在

現在の状況を「サパティスタの流行は過ぎ去った」とマルコス副司令官は自嘲的に語る。サパティスタ支持を表明してきた多くの知識人と袂を分かち、マスコミの注目を集めることもなくなく孤立を深めているからである。サパティスタは二〇〇五年第六ラカンドン密林宣言で既存の政党や組織に頼る左翼との訣別を宣言し、二〇〇六年大統領選挙に対抗して「別のキャンペーン」を行った。そのなかで既存のあらゆる政党を批判し、政党政治に頼らない連帯を訴えた。一方大統領選では、不正が指摘されなが

らも前政権に引き続き右派の国民行動党が担当することになった。このためサパティスタは、政権交代を目標に民主革命党（PRD）の候補者を支持することで一致団結していた左派を分裂させ、PRDの選挙戦の足を引っ張ったとして多くの批判を受けた。これをきっかけにエレナ・ポニャトウスカやロサリオ・イバラをはじめ、多くの左翼知識人がサパティスタから離れていくことになったのである。しかし自嘲の裏には自分たちは着実に歩を進めているのだという自信が秘められている。二〇〇三年に自治区の再編を行い、新たな自治のあり方を模索し続けているからである。

二〇〇三年三九の行政区が参加して、カラコルと呼ばれる五つの自治区が作られた。地域は蜂起後に形成された自治区とほぼ一致しており、その再編が行われたといっている。自治区の再編には、自治区内の不公平の解消と、新しい自治の実践という二つの目的があった。一〇年近くに及ぶ抵抗生活のなかで、NGOとのつながりが深い村とそうでない村との間に格差が生じていることが、サパティスタの村々で大きな問題となっていた。そこで外部との窓口を一本化し新しい統治方法をとることで、平等

化がはかられたのである。カラコルは先住民言語別に分けられており、密林地域にはツェルタル系先住民のラ・ガルチャ、モレリア、トホルバル系のラ・レアリダー、北部にはチヨル系のロベルト・バリオス、そしてチアパス高地にはツオイイル系のオベンティックがある。それぞれのカラコルに七、八の行政区が属して、「善き統治評議会」という政府を中心として自治を實踐するようになった。では彼らの言う新しい自治とはなにか。一言でまとめれば「政治家というプロはいらない」ということである。政治家は専門職である必要はなく、市井の人が必要に応じて担当すればよい。皆で持ち回りにすることで、特定の権益が発生するのを防ぐことができるというのが、基本姿勢である。「善き統治評議会」のメンバーはすべて当番制で、基本的には参加する村の成人全員に順番が回ってくる。たとえばオベンティックの場合、各行政区が三人ずつ代表を出し、三つの評議会、グループを作る。その三つのグループが一週間交代で行政を担当し、三ヶ月後にはグループが解散、新しい3つのグループがふたたび一週間交代で行政を行う。評議会の下に広報、衛生、教育などの委員会があり、カラコルごとに独自のシステムを作っている。当番制には既得権益を排除することで、政治を透明化し腐敗を防げるというメリットの一方、評議会メンバーによって政治のやり方が異なり、計画を継続するのが困難に

なるというデメリットもある。しかしこれが六年にわたって続けてきた彼らの流儀という民主主義であり、その成果がママ・コラル集会で垣間見られた。

2. ママ・コラル集会

ママ・コラル集会は、二〇〇九年三月七、八日にオベンティックで国際女性デーにあわせて開催された女性による女性のための集会である。参加資格は女性のみ、男性は清掃や子どもの世話など雑用を担当する。女性が企画進行まですべて行う集会は、二〇〇八年一月二日にラ・ガルチャで開催された「ラモナ司令官とサパティスタ女性」集会について二回目の試みだ。ママ・コラルとは、メキシコ北部シウダー・フアレスで行方不明者を探す家族会の活動をしてきたコンセプション・ガルシア・コラルという女性の愛称である。二〇〇九年一月二十五日に亡くなった彼女へのオマージュとして急遽名を冠したという。とはいえこの集会の目的は対外的なアピールでも、国内のグループとの連帯でもない。高地のサパティスタ村落の親睦が目的であり、地元の人たちが楽しむための文化祭のようなものである。参加者の正確な人数はわからないが、いくつかの新聞で後日「数千人の先住民がオベンティックに集まった」と報道されていた。私のような外国人は少数で、「別のキャンペーン」を支持するメキシコ人のグループが

いた以外は、ほとんど高地の先住民だった。オベンティックはチアパス高地にある唯一のカラコルで、サン・アンドレス、アルダマ、カンクック、シモホベル、エル・ボスケ、ポロー、パンテローという七つの行政区が参加している。行政区とは主村のようなもので、その周りにいくつもの小村が点在している。実際には村のなかにサパティスタと非サパティスタがいる場合が多く、兄弟同士で支持が異なることもめずらしくないという。集会に参加するのは皆サパティスタを支持している人だそうで、グループを組んで続々やってくる。たいがい男性が太い棒とビニールシートを持ち、女性たちが細かい荷物や子どもを抱えている。すり鉢状に作られた村の斜面におもむろに棒を打ち込み、ビニールをかけて簡易テントを作っている。焚き火を持ってきて調理している人たちもいる。どの顔も嬉しそうで村全体に浮き立つような高揚感が漂っており、この集会を楽しむにできたことがうかがえた。村には木製の小屋がいくつかあって、そこにビニールと毛布を敷いて寝ることも可能だが、早い者勝ちらしくあつという間にうまくてしまう。遅れて来る人たちは小屋を当てにせず、最初からテントを持参していたようだった。集会は七日昼頃から始められた。昼間は運動場でバスケットとバレー大会だ。参加できるのは女性のみ。男性はVZ（サパティスタ警備）と腕章をつけて見回りをしたり、調理係をし

たりしている。屋台の準備をしている人たちもいる。暇な男性は、うらやましそうにバスケットの試合を眺めている。一方、メキシコ各地からやってきて、道端で店を広げている人たちもいる。籠細工やポスター、自作のCDなどを並べて売るので、これは「文化活動」の一環ということになっていて、善き統治評議会と呼ばれる村の事務所に行つて許可をもらう必要がある。各グループはまず申請を行い、それに基づいて面接を受ける。文化活動の内容や目的を説明し、問題がなければ販売の許可をもらえるというわけだ。晴れて許可された人たちは、適当な場所に陣取り、持ち込んだものを並べていく。

夜六時頃から文化イベントが始まった。あらかじめ登録していた女性グループが、歌や踊りを披露するのである。すり鉢状の底辺には野外ステージがあり、司会者が登録順に呼び出しをかける。「続いてはピセンテ・ゲレロ村の“ガジート”グループによる、踊りです。その後テ



3. 自治区へ行くには

サパティスタの村を訪問するのは、現在難しいことではない。一時ほどの賑わいはないものの、サン・クリストバルの町には村を訪問するためにやってきた外国人が多く滞在している。なかには一つの村から帰ってはまた別の村に行き、長期にわたって自治区で生活する人もいるという。彼らのことを快く思わない町の人々は「サパツリーズム」と揶揄するが、気にすることはない。村に滞在する動機は人それぞれ、ツーリスト気分だろうが連帯だろうが、村の人々にとってはどうでもいいのである。外国人のプレゼンスは、低強度戦争のなかで一定の抑止力



になるだろう。い
ないより
はいたほ
うがいい
くらいい
気持ちで、
興味のあ
る方はぜ
ひ訪れて
ほしい。
村を訪問
する方法
は、大き

く分けて2つある。一つは人権監視活動に参加することであり、もう一つはカラコルを直接訪問することである。以下にそれを紹介したい。

サパティスタと政府は、一九九五年二月に停戦協定を結んで以来表面上武装衝突は行われていないものの、蜂起後の数年間は「低強度戦闘」とよばれる政府軍および準軍事組織（私兵のようなグループ）によるサパティスタ派および中立派の住民に対する嫌がらせが続き、避難民も相次いだ。こうした事態を受けて地元のNGOの呼びかけで始まったのが、外国人を含む第三者による人権監視活動である。この活動を行っていたNGOはサン・クリストバルに三つあったが、二〇〇九年九月現在フライ・バルトロメ・デ・ラス・カサス人権センター（通称フライバ）のみとなっている (<http://www.frayba.org.mx>)。毎週月曜日に参加希望者を募って二〜四人のグループを作り、火曜日に準備、水曜日出発して一五日間村に滞在するというのがおおまかな流れだ。オブザーバー活動の特徴は、1) 滞在する村、期間はNGOの指示に従う2) 移動、食料調達をグループで行う3) 滞在中の様子をNGOに報告する、というところにある。オブザーバーとして参加するには推薦が必要となっているが、詳しいことはメキシコ先住民運動連帯関西グループ（HYPERLINK "<http://homepage2.nifty.com/Zapatista-Kansai/>" <http://homepage2.nifty.com/Zapatista-Kansai/>）が情報を提供している。

一方二〇〇三年カラコルが創設されてから、EZLNが直接外国人を受け入れるようになった。パスポート持参でカラコルを訪ね、「善き統治評議会」で滞在目的や日数などを話して滞在許可をもらう。この場合、カラコルまでは自力で行かなくてはならない。地域によっては政府軍の駐屯所を通らなければならず、危険がまったくないとはいえない。また一つの村のなかにサパティスタ、反サパティスタが住み分けていたり、近隣に強固な反サパティスタの村がある場合もあって、注意する必要がある。状況は刻々と変わるため、現地滞滞経験者の話を聞いてから行ったほうがいいだろう。現地で日本語の情報が欲しい場合は、Casa Kasa (http://www.geocities.jp/sancristobal_casakasa/) という日本人宿がお勧めだ。自治区に滞在した人たちのノートがあり、それを読むとだいたいの様子をつかむことができる。オベンティックのような日帰り圏内の村へは、宿の人が同行してくれることもある。宿泊するかどうかは別として、自治区への行き方や現状などを日本語で知りたければ訪問してはいいかだろう。

連載第三四回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

第51景

ニクソンとメディシの陰謀

Ⅱ米國務省公開文書Ⅱから

一九七〇年代初頭、米伯両国がラ米反共戦略を共同で推進しようとしていた事実が最近あらためて明らかになった。米國務省が二〇〇八年九月八日に黒墨を入れて修正したうえで機密指定を解除し公開した文書が、二〇〇九年八月半ば米国の民間研究団体「ナショナル・セキュリティ・アーカイヴ（NSAⅡ国家安全保障文書）」によって配布され、脚光を浴びている。当時、メキシコ市を拠点にラ米情勢を取材していた私にとっても、極めて興味深い内容だ。

この文書は、ホワイトハウス（米大統領政庁）が一九七一年一月九日付で記した米伯首脳会談に関するメモランダムで、当時のリチャード・ニクソン大統領（一九一三―一九九四）の行政記録文書として、同大統領の国家安全保障担当補佐官（その後七三―七七年國務長官）ヘンリー・キッシンジャーがまとめた形になっている。会談したのはニクソンと、訪米していた当時のブラジル軍政大統領エミリオ・ガラスタズーⅡメディシ將軍（一

九〇五―八五）で、在仏・米大使館付武官で次期CIA副長官就任が内定していたヴァーノン・ウォルターズ少将が同席した。

最も重要な会談内容は、チリのアジェンデ人民連合（UP）社会主義政権打倒のクーデターに向けて協力することで合意した部分だが、他の部分も重要であり、公開文書に盛り込まれているテーマ順に紹介する。私が付記した部分は「」で囲んだ。

▽米州開銀問題

会談初めの挨拶が終わると、メディシは「米州開発銀行（BID）のオルティスⅡメナ総裁と会談したばかりだが、総裁から銀行支援の要請をニクソン大統領に伝えてほしいと依頼された」と切り出し、ニクソンは「米議会が善処するはずだ」と応じている。

「この総裁はメキシコ経済相経験者で、経済相だったころ、一九七〇年のメキシコ大統領選挙に当時の政権党PRI（制度的革命党）候補として出馬したがっていた。だが当時のグスタボ・ディアスⅡオルダース大統領はルイス・エチェベリア内相を後継候補に指名し、内相が選挙を経て大統領に収まる。私はそのころ、PRI党内の勢力争

いを取材しており、内相と経済相の権力闘争を目の当たりにしていた。だから、メディシが総裁の名前を出したのを知って、妙に懐かしかった。」

▽米玖関係
次にニクソンは、キューバ問題を取り上げ、

「我々の対キューバ政策が変化しつつあるとの報道や噂があるが、全くの間違いだ。カストロ体制と革命輸出の策謀が続くかぎり、政策は変わらない」と強調した。メディシは「その言葉を聞いて大変嬉しい。ブラジルの立場とまさに同じだ」と応じた。

▽ペルー軍政

メディシは続いて、「ペルーは、キューバのOEA（米州諸国機構）復帰を目指し、OEA内に検討委員会を設置しようとして作業している。我が方の外相（ギブソン・バルボーズ）は、伯米両国の委員会参加問題がいずれ浮上し、参加して委員会内部からキューバ復帰に反対するのが得策か、それとも委員会参加をはねつけるべきかの問題になると指摘している。米国が委員会に入れば、キューバ復帰を認めていると受けとめられてしまうかもしれない。ブラジルの参加についてどう思うか」と、ペルー左翼軍政のファン・ペラスコリアルブラド大統領の動きに関連して問題提起する。ニクソンは「興味深い問題であり、十分検討してから回答を伝える」と応じている。

「キューバのOEA復帰問題は二〇〇九年六月初め、ホンジュラスのサンペドロスーラ市で開かれた第三九回OEA外相会議で、キューバ加盟資格停止決議（一九六二年）が廃棄されて一応の決

着をみた。だが、キューバには復帰の意思はない。OEAの枠外に居続け、米国と退治し続ける方が得策だからだ。」

▽直接回路

ニクソンはそこで「我々は馬が合い、視点も一致している。密接な関係を維持するため、通常の外交チャネルではない直接の回路を設置したい」と切り出し、その窓口としてキッシンジャーを指名した。メディシは、外相にして私設顧問である側近中の側近バルボザを指名した。さらに、「ブラジル軍政・軍部と密接な協力関係にあるブラジリア駐在の米軍武官モウラ大佐が近く転勤すると聞いているが極めて残念だ」と表明する。ニクソンは、「大佐の功績は把握している。大佐を准将に昇格させ、ブラジルに武官として留まらせる」と答えて、メディシを喜ばせる。

▽亡命キューバー

メディシは、米州に数多くいる反革命亡命キューバー人の存在に触れて、「彼らは、カストロ体制を打倒する能力があると主張している。我々は彼らを支援すべきか」と問いかける。ニクソンは熟考した後、「我々が支援できない計画に彼らを巻き込むのではないかぎり、また、我々の関与が極秘裏に保たれるかぎり、支援すべきだと思う」と答えた。メディシは同意し、「ブラジルの協力が必要だと思つたら、直接回路で伝えてほしい」と言った。「ここで興味深いのは、一九六一年四月のヒロン浜侵攻作戦の惨敗である。アイゼンハワー大統領はカストロ体制打倒のため、この作戦を決めたが、ニクソンは副大統領として深く関与していた。

CIAと米軍顧問団が亡命キューバー人を中米で訓練し、ヒロン浜に上陸させたが、作戦実行時の大統領はケネディだった。ケネディは作戦失敗が濃厚になった時点で、米軍介入の要請を拒否した。米政府は、フロリダに「キューバ亡命政権」をあらかじめ擁立しており、作戦が勝利しそうになったら直ちに「亡命政権」を承認し、その要請を受けて介入する筋書きを用意していた。」

「だが、作戦は惨敗し、米軍介入の機会は訪れなかったのだ。ケネディは一九六三年に暗殺されたが、ヒロン浜作戦時の米軍介入を許可しなかったのを恨んでいた米国内の反動勢力が暗殺に関与したとの見方が消えていない。ニクソンは明らかに、ヒロン浜敗北の苦い経験から、「我々が支援できない計画に巻き込まない」という教訓を得ていたのだ。」

▽ポリビア

この後、メディシは、「ブラジルはできる範囲で近隣諸国、とりわけポリビアを援助している。最近、ポリビアの關係が来て、代金の三年間支払い猶予、その後一〇年払いで、砂糖三万トンを売ってほしいと我々に求めた。支払い方法が通常の取引とかけ離れていると答えると、彼は砂糖が欠乏すれば政府は倒れ、左翼が政権を握る。これは政治問題なのだ」と迫った。そこで彼の言う条件で砂糖を引き渡すことにした」と、バンセル・ポリビア軍政との取引を披露した。続けて、「すると、今度はブラジル製ジェット戦闘機一〇機を同様の条件で売ってほしいと持ちかけてきた。私は、経済困難にある国が戦闘機を買いだとは馬鹿げてい

ると言つて、断つた。イスパノアメリカ(スペイン語系ラ米)人の考え方を理解するのは難しいと思つたが、ニクソン大統領にとつては一層難しいだろうと思つた」と述べた。メディシは、「伯米両国は西語系ラ米との取引に難しさを抱えているが、我々がポルトガル語を話し、米国が英語を話すからだろう」とつけ加えた。

「北の米国と南のブラジルが協力して、間に挟んだ西語系ラ米にらみを利用させる極秘会談をメディシとニクソンはしていたわけだ。この会談に先立つ一九七一年八月、ポリビアで流血の軍事クーデターが起き、左翼人民主義路線を走ろうとしていたファンホセ・トーレス軍人大統領の政権は倒れた。ポリビア軍部右翼の大佐だったウーゴ・バンセルを背後で操っていたのが米伯両国だった。メディシとニクソンは、ポリビアでの「成功例」に立って会談したのだ。私は一九七三年に、ブエノスアイレスで亡命生活を送っていたトーレスにインタビューしたが、トーレスは七六年三月、同市郊外で射殺体で発見される。米伯が南米軍政と組織した左翼暗殺のための「コンドル作戦」の犠牲者になったのだ。」

▽ストロエスネル

メディシは、西語系ラ米人がやっかない例として、当時のパラグアイ大統領アルフレド・ストロエスネル(一九二二—二〇〇六)について語った。「彼は頑迷な反ポリビア主義者で、ポリビアには何も与えまいと決め込んでいた。ブラジルは、パラグアイと共同で、パラナー川にイタイブダムを建設している。発電される電力(1200万kw)

は折半するが、パラグアイにはそれだけの需要がないため、ブラジルが余剰分を買い上げることになる。そこで、パラグアイはその買い上げによる収入の一部を用いてポリビアに何らかの援助はできないかと、ストロエスネルに持ちかけた。ポリビアは支援が得られなければ共産圏に接近し、武器を含む巨額の援助を受けるようになるだろう。

そうなれば、彼らはチャコ戦争（一九三二―三五年）パラグアイが勝利）の結果をひっくり返すことさえ試みかねないと言った。するとストロエスネルは最終的に話を理解した。「ニクソンはこの話を聞いて喜んだ」と、公開文書は記している。

「ストロエスネルは、チャコ戦争で戦功のあった軍人で、それを足場にのし上がった。一九五四年から長期独裁政権を率いていたが、一九八九年クーデターで追放され、ブラジルで亡命生活を送り、死んでいった。私は、ストロエスネルの政権末期、彼のすぐ身近に数十分間いたことがあるが、質問は一切許されなかった。」

▼ラヌーセ將軍

メデイシが、「アルゼンチンとの間はいちばん難しいかもしれない。ラヌーセ（当時の亜国軍政大統領）が来訪したとき、大統領同士でなく將軍同士としてぎっくばらんに話し合おうと努めた」と言うと、ニクソンは、「私はアルゼンチン情勢を懸念している。ラヌーセ訪伯後のあの国の話を聞かせてほしい」と求めた。メデイシは同意したが、公開文書には、それ以上の記述はない。

「ラヌーセは、軍政ではアルゼンチン政治の混乱状態から脱することはできないと悟り、スベイ

ンに亡命していた。ペロン將軍に帰国を促した人物だ。私は後年、引退後のラヌーセにインタビューしたが、「民主化を実現した將軍」であることを誇りにしていた。このようなラヌーセの政治的作風が、極右反共軍人メデイシには不可解だったのだろう。」

★チリ政権転覆謀議

チリ情勢を切り出したのはメデイシだ。「アジエンデは、ブラジルのゴウラル政権が打倒されたのと同じ理由で倒されるべきだ」と提起した。ブラジル軍部は一九六四年にクーデターでゴウラル政権を倒し、カステロ・ブランコ、コスタ・イリシルヴァの二代軍政大統領の後を受けたのがメデイシなのだ。私がブラジル現地取材を始めたころは、まさにメデイシ政権時代で、都市ゲリラ闘争が激化し、当局は徹底的に弾圧していた。メデイシこそ、五代二一年続いた軍政大統領のなかで、最も厳しい弾圧を加えた指導者だった。

ニクソンが、「チリ軍部には、アジエンデを倒す能力があるか」と訊くと、メデイシは、「あると思う。ブラジル軍部はチリ軍部と多くの士官を交流させてきており、ブラジルは、その目的（アジエンデ政権転覆）のために活動している」と明言した。ニクソンは、「その分野で伯米両国が緊密に協同するのは極めて重要なことだ。米国は指揮は執れないが、我々に何か支援できることがあれば、指摘してほしい。資金や極秘の支援などが必要ならば、提供は可能だと思つ。この件は最大限、秘密が維持されなければならないが、新たにカストロ型やアジエンデ型の人物が登場するのを防がな

ければならず、そのような傾向があれば覆さなければならぬ」と応じる。メデイシは、「伯米双方の立場と見方が極めて接近しているのが嬉しい」と言った。

「ニクソンはチリクーデター後に行なわれたインタビューで、「ある時、イタリア人実業家が私の所にやっけてきて、ヘカリブ海にキューバがある。チリにアジエンデ政権が登場すれば、南米は共産主義のサンドイッチになってしまう」と言っていた」という逸話を語っている。自らの関与を一切表に出さず、淡々と語っていた。」

▼ペルーでの策謀

ニクソンは、「ウォルターズ將軍は来年（一九七二年）三月か二月末にパリから戻り、CIA副長官に就任する。これをお伝えしたい」と言う。メデイシは、「その人事は、ニクソン大統領にとって特にラ米の問題で助けになると思つ」と応じた。

ニクソンは、「ペルーのベラスコ・アルバラード政権については、我々の対応は幾分異なるようだが」と、再びペルー問題に話を戻す。メデイシはOEAへのキューバ復帰工作の話を繰り返す。ウォルターズ將軍が口を挟み、「ベラスコは国内で問題を抱えることになるはずだ。私がパリに赴任したころ、ベラスコは武官としてパリに駐在しており、愛人との間に子供が一人いた。彼女は元ミス・ペルーで、左翼思想の持ち主であり、そのような政治活動をしていた。この事実が明らかになれば、ベラスコは窮地に陥るだろう。元首のそのような行為は、ペルー軍部高官たちから大目には見られないはずだ」と指摘した。

「ベラスコは一九七五年、軍部内クーデターでモラレス＝ベルムデス將軍に取って代わられたが、愛人との隠し子問題がベラスコ播きぶりなどでこまで効果を発揮したのはわからない。ベラスコは「軍事革命政権」を標榜し、国内改革や対米自立外交を推進したが、モラレスになると穏健化し、やがて民政移管となる。」

▽アマゾン

ニクソンは話題を変えて、ブラジルが陸軍工兵部隊を使って国内遠隔地に自動車道網を建設している件について質問する。メデイシは、「アマゾンで建設中だ。工兵部隊の兵士たちには任務を解除し、現地に土地を与えて定住させる政策をとっている。農民に土地を与える農地改革も推進している」と説明する。ニクソンは、「それらの自動車道建設は汎米自動車道とどう絡み合うのか」と問う。メデイシは、「ブラジルと、ウルグアイ、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビアとの接続はうまくいっている。ボリビアを除く三方国とは舗装道路で結ばれている。現在、ブラジル最西端からペルーのプカルパに抜ける道路を建設中で、これによりブラジルとペルー、エクアドール、コロンビアはつながることになる。ペネズエラ、ガイアナとは隔絶したままだ」と応える。

▽米伯関係

ニクソンが、この首脳会談の共同声明の案分について意見を訊くと、メデイシは満足していると答え、「声明以上に大切なものは、ニクソン大統領と緊密な関係を結び、多くの問題で見方が一致したことだ」と述べた。ニクソンは、「同意見だ。緊密

な関係を維持したい。米国にはできないが、南米の国ブラジルにできることがたくさんあるから」とつけ加えた。メデイシは、歓待に感謝しニクソンとの友情確立を喜び、その後の協力関係推進を口にした。二人は別れの挨拶を交わし、ニクソンはメデイシを自動車まで送っていった。

【▽引き継がれた陰謀】

「ニクソンは大統領二期目の一九七四年八月、ウォーターゲイト事件で引責辞任し、副大統領ジエラルド・フォードが大統領に昇格した。メデイシは同年、軍政四代目のエルネスト・ガイゼル將軍に政権を渡した。ニクソンとメデイシが手がけたラ米での陰謀は、フォードとガイゼルに引き継がれた。私は田中角栄首相の訪伯時に、ブラジリアでのガイゼル記者会見に臨んだが、記者対応がまともできない、頭の回らない軍人という印象を受けた。ニクソンが死んだ一九九四年四月、私はたまたまカリフォルニア州を自動車で取材中だったが、至る処で半旗の星条旗を見た。何か、因縁めいたものを感じた。」

（公開文書関連部分は以上で終わり）

☆NSAのチリおよびブラジル担当幹部ピーター・コーンブルは、米側文書公開と関連させて、「ブラジルが機密文書を公開する番であり、それなしには真相は解明できない。ルーラ大統領に要請している」と述べた。

☆CIA文書によると、メデイシは会談で、「伯米が協同してラ米でのマルキスト・左翼主義の台頭を抑え込もう」と提案し、ニクソンは、「いつでもどこでもブラジルを支援する」と答えた。これに

ついて、ブラジル陸軍高官ウイセンテ・コウチーニョ將軍のように、「米国は明らかにブラジルに汚い仕事をさせたがっている」と警戒する声も出た。

☆一九七二年CIA諜報予測：ブラジルは、ラ米に米国が残した空白部分を埋める役割を拡大しようとしている。

☆二〇〇二年NSC指摘の解除済み米伯会談関連機密文書：一九七一年二月二〇日ニクソンは当時の英首相エドワード・ヒースと会談した。南米におけるブラジルの役割について話し合い、ニクソンは「我々の立場はブラジルに支持されている。ブラジルの支援は、将来にわたって鍵となる。ブラジルはウルグアイ大統領選挙の不正操作を支援した。すでに状況は動いている」と述べた。

「この「不正操作」は、一九七一年の拡大戦線候補リベル・セレーニ將軍（一九二六―二〇〇四）の勝利を阻んだことを意味する。（当選した）ポルダベリは一九七三年六月、軍部と組んでお手盛りクーデターを打ち、弾圧体制を敷き、セレーニも長期間投獄された。これが三か月後のチリ軍事クーデターへと続いていく。拡大戦線を中核とする左翼・民主連合は二〇〇四年の大統領選挙でタバレー・バスケス現大統領を当選させたが、その三か月前にセレーニは死去した。私は一九八〇年代末にモンテビデオでセレーニにインタビューしたことがあるが、獄中生活の話が記憶に残っている。」

「ペルー黒人打楽器カホンの歴史」

箱型の木製打楽器カホンは、ペルーの黒人音楽を代表する楽器としてのみならず、ペルーの海岸地方を象徴する楽器として、今や語らずに済まずこのできない重要な地位を獲得している。しかしその歴史に目をむけてみても、その姿は漠然としてどのように今の地位を獲得していったのか、なかなかはっきりとしてこない。その理由の一つは、おそらくカホンを使っていた黒人のコミュニティに関する歴史的な記述が少ないこと、そしてもう一つは、大衆音楽に取り入れられたのが一九世紀以降であったことにあるようである。ともかく、今回は、カホンに代表されるペルーの黒人打楽器の歴史を簡単に追いかけてみたい。

カホンに関する最も古い記述は、一六七一年のアルパ（ハーブ）とカホンの共演の記録だとされる。しかし、不思議なことにこの唯一の記録以降、一七〇年間再びカホンの記録は見つかっていない。

一六八二年の新聞では、黒人たちがアルパとギターでサンタ・ロサの祭りを楽しんでいる様子が描かれているが、カホンは登場しない。以降も、アルパ、ギター、ビウエラ（ギターの先祖）、バンドーラ（マンドリンの一種）などは登場するが、記録に打楽器が登場する

ようになるのは、一七九〇年頃からである。その打楽器も、鈴やパンデーロ（タンバリン）のようなもの、ロバの顎骨を叩いて鳴らすキハーダなどでカホンはまったく見られない。また余談だが、当時の記録によれば黒人たちは鼻息で鳴らす小さな笛を吹いていたらしい。どんなものだったか、非常に気になることしきりである。

一八世紀当時の下層社会の様子を水彩画で描き、当時の生活を知る手がかりを遺したパンチョ・フィエロの絵には、黒人たちがマリオンバ（木琴）やギロなどを演奏している姿が残っている。また、カヒータと呼ばれる蓋のついた小箱を首からぶら下げて、蓋を開閉させたり側面をバチで叩いて鳴らして演奏している姿も描かれている。しかし、カホンの姿はどこにも登場しない。また同じく一八世紀には、アルパの胴をカホンのように叩く記述や絵が遺されている。この奏法は、現在もチクラヨなどペルー北部の一部地方で行われている奏法だ。

一九世紀に入りカホンに先立って記録にあがってくるのが、チェコだ。チェコとは、大きなヒョウタンで叩くとポコポコとカホンよりもかわいい音が鳴る楽器だ。ペルーの北部海岸地方では今もわずかに使われている。

結局カホンが再び文献に登場するのは、十九世紀半ばだ。一八四一年には、サマクエ力を踊っている絵の中に、カホンを叩いていると見られる姿が描かれている。また四八年には、明らかにサマクエ力の中でカホンを叩いている姿が記述として遺されている。このように、カホンは、サマクエ力を演奏するための始めの音楽として歴史の中に再び登場した。この時代、サマクエ力は大流行しており、パーティーなどでもカホンはサマクエ力の重要な伴奏役として急速に定着していった。しかし、サマクエ力以外の音楽でカホンが叩かれた記録はこの時期見つけることができない。

それでは、今やペルーのクリオーヤ音楽にとつて欠かせることのできないカホンが、その中心となる音楽、バルスに取り入れられたのはいつ頃なのか。それが、あまりに最近の出来事で、驚かれる方もおられるかも知れない。バルスの中でカホンが導入されたのもっとも古い記録は、一九四〇年代初めだ。当時ある有名なナイトクラブで、非常に盛り上げ上手なカホン奏者がいた。彼は、毎日一番最後に演奏されるマリネラ（サマクエ力）の演目が来るまですることがなく、隅っこで居眠りをしていたのだが、ある時支配人がナイトクラ



ブを盛り上げるために試しにカホンをすべての曲に取り入れてみたところ、大盛り上がりになり盛りが上がった。それ以降、彼らはラジオ公演などを通してカホンを入れたバルスを積極的に演奏し、瞬く間に流行して多くのクリオーヤ楽団がカホンを積極的に取り入れ始めた。しかしせっかくの機会であったにもかかわらず、突然のカホン奏者需要に奏者が足りず、結果的に誰でもよい、という感じの演奏技術の低いカホン奏者がバルスに合わせて適

当に叩くことが一般化し、カホンの地位は返って貶められてしまう。結局、五〇年代を通してバルスの伴奏にカホンは加えられはしたが、録音などに際してはカホンは外される屈辱的な状況が続いた。

五〇年代には、黒人音楽の復興に尽力したニコメデス・サンタ・クルスなどの活動が徐々に始まり、カホンが黒人音楽の中心的打楽器として次第に注目され始める。六〇年代には、ニコメデスの姉ビクトリア・サンタ・クルスが、カホンだけの伴奏で黒人舞踊を踊る試みをはじめると、本格的にカホンを使った黒人音楽・舞踊の発展を目指し、ペルー・ネグロなどのグループの登場と相まって、カホンペルー黒人音楽というイメージが強化されていった。この流れの中、ついにバルスの録音の中でもカホンを使うことが一般化し始める。その最初の録音を特定することは難しいが、その最も初期のものに、ニコメデス・サンタ・クルスとも活動を共にした名ギタリスト、カルロス・アイレとシンガーソングライターのアリシア・マギーニャによる録音がある。この録音の評価が高かったため、これ以後、カホンを取り入れたバルスの録音が一気に増えたと言われている。

このようにしてカホンは次第にペルーの海

岸音楽になくってはならない楽器として定着していった。

また、先程触れたカヒータという小型の箱型打楽器も、歴史の波間に消え去ろうとしていたところを、黒人カホン奏者アベラルド・バスケスが八〇年代より復興に尽力し、無事黒人打楽器としての地位を再び確固とした。このように、楽器を見るだけでも黒人音楽が時代を経る中でどんどん変わっていくのが見えてくる。その背景には、さらにペルー国内の事情や世界的なムーブメントなどがさらに織りなしているが、今回は煩雑になるし、紙面の関係もあり割愛した。またおいおい触れていければと思う。

ちなみに、この後カホンは、ペルーを代表するカホン奏者カルロス・カイトロ・ソトがパコ・デルシアにカホンを贈ったことから、スペインに持ち込まれ、新しいフラメンコの楽器として改良され定着した。このスペイン・スタイルのカホンが、やがて日本にも入ってきて現在我々が目にするようにストリートで活躍するようになった。今やストリートで演奏される打楽器の花形は、はるか地球の裏側に位置する日本まで、このような旅路を辿って来たのである。

(水口良樹)

エクアドル —— 初の先住民族テレビ開局

7月16日、コトパクス州の県都ラタクンガで、キチュア語で放送される初めての先住民族テレビが開局した。先住民族が（言葉の問題で）マスメディアにアクセスすることができない、ということから、2004年に、コトパクスの先住民農民運動(MICC)が主導して開局にいたったもの。MICC テレビはチャンネル47として、MICC傘下の33グループで共有することで2008年9月に認可された。

放送機材一式にかかった費用は11万5千ドルで、その費用はエクアドル先住民族開発審議会(CODENPE)が負担した。東部地域や中心部の400の共同体に向けて発信され、番組の60%が主にキチュア語での情報や教育放送で、40%がスペイン語での放送となる。アンデス先住民族調整組織(CAOI)によれば、この放送は、先住民族が自らの言葉で表現することで、多民族国家を後押しすることにもなるだろう。500年以上にわたって、存在を否定されてきた先住民族が、ミンガ(先住民族の共同行動)を強化し、自らの手で歴史を記しはじめるのだ。テレビ放送を維持するためには、諸経費を含めて月額3千ドルから5千ドルかかる。公共放送なので、広告収入が入らないことから、放送を経済的に継続させるための番組作りや協定などが検討されている。

(Noticiasaliadas 12/08/2009 より)

チリ —— マプーチェの若い活動家の死

8月12日、首都サンチアゴから650km離れた南部ラ・アラウカニア地域でマプーチェの若い活動家が、先住民が占拠していた大農園から強制退去させられる中、警察官の発砲を受け死亡した。これにより、治安部隊とマプーチェ先住民共同体のメンバーとの間での紛争が深刻化している。マプーチェはチリで最大の先住民族集団で、紛争が起きているラ・アラウカニア地域はマプーチェの土地回復要求運動の中心地であり、80年代から多くの土地が林業系企業によって占拠されている。

13日、バチレ大統領は活動家の死に哀悼の意を表して、事件の真相究明を命じ、「ラ・アラウカニアでの暴力は決して正当化できない、マプーチェ先住民族の正当な歴史的な要求を解決する道は対話しかないことを理解しなければならない」、と述べた。警察は、活動家に発砲したのは「正当防衛」だとしている。2003年以来ラ・アラウカニアでの警官との衝突での死亡はこれで3人目となった。先住民自治共同体は治安部隊による弾圧を糾弾しているが、治安当局も先住民の抗議活動に伴う暴力が増大していることを非難している。マプーチェ先住民は土地や自治を求める先住民運動への弾圧に加えて、これがピノチェト独裁政権時代に作られた反テロリズム法で裁かれていることを懸念している。政府は紛争解決の糸口を探るため代表団をラ・アラウカニアに派遣すると発表した。その実効性は疑問視されている。(BBC Mundo 2009/8/13 より)

ペルー —— 出産時における母親の高い死亡率

「ペルーはラテンアメリカで最も経済成長が速い地域となっている。けれども政府は先住民女性や貧困層の妊婦の健康に対して適切な医療サービスを行っていない」とアムネスティ・インターナショナル(AL)の報告書は指摘している。今年7月初めに出された同報告書では、ペルーはラテンアメリカで出産時に母親が死亡する率が最も高く、国連によれば10万人の新生児に対して240人の母親が出産時に亡くなっているという。その大多数は農民、先住民、貧困層の女性たちである。緊急事に対応する産科医がいないこと、妊婦の健康に関する情報不足、さらに先住民言語を話すかかりつけの医師がいないことなどが原因である。母親の高い死亡率は、大きな問題であり、国家が全ての女性に対して分け隔てなく産科医療を行う義務を果たしていないことなどが指摘される。山岳地域での貧困率は地域人口の9割近くにのぼる。

同報告書はペルー政府に医療従事者に先住民言語を教えるよう要求している。なぜなら、医療従事者が先住民の言語を話せないことによって、貧困層に対する医療が制約され、患者はスペイン語が話せない上に、貧困によって医療を受けられないからである。貧困層の女性たちは常に政治的決定の場から排除され、彼女たちの意見が政治や法律に反映されることはほとんどない。そして社会や行政はこうした人権侵害を事実上見過ごしている。

(Noticiasaliadas.org 23/07/2009 より)

材料 (4 人分)

- ・皮を取り除いたタラの切り身 4 切れ (各 100 グラム)
- ・ホールマッシュルームの缶詰 1 缶 (85 グラム)
- ・かいわれだいこん
- ・バター 大さじ 2 杯
- ・ニンニクペースト 大さじ 1 杯
- ・フランスパン
- ・塩
- ・白ワイン 1 カップ
- ・レモン 1 個
- ・生のパセリ
- ・ニンジン中 1 本

作り方

- 1) タラの切り身を洗って平皿に載せる。
- 2) レモンを半分に切り、切り身の上にしぼり、1 時間ほど置く。
- 3) フライパンで、ニンニクとマッシュルームをバターで炒め、タラの切り身を加え、その語に白ワインを加えて塩で味をととのえる。
- 4) ニンジンの皮をむいてゆでてから、薄く輪切りにする。
- 5) フランスパンを薄切りにしてトーストする。
- 6) 魚の切り身を平皿にのせ、ワインとバターのソースをかけ、パセリとかいわれ、マッシュルーム、輪切りにしたニンジン飾る。

ミゲル先生のメキシコ食巡り

タラのカリブ風



メキシコではタラは、カリフォルニア半島などの海水温の低い海域でとれる。

水深 600 メートルの深海まで棲息し、180 センチから 200 センチにまで成長する。

カリブ海側のユカタンでは、とくに復活祭前の四旬節に食卓にのぼる。

私の故郷のユカタンには、タラの料理の種類はそれほど多くはないが、どれもとてもおいしい。子どものころ、家で作ってくれるタラの料理は私の大好物だった。

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986 年来日。「FM COCOLO」で DJ をつとめた。大阪・天満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>) 主宰。メキシコ料理店を開くため、準備中。

＊＊ Informacion ＊＊

お知らせ

◆かんまききよみ + 篠田ゆかり グアテマラ手作り絵本展◆

期間：10月4日(日)～18日(日)(13日休み) 11:00～19:00

場所：YogiYogi (ヨギヨギ) <http://www.golf-baxter.com/yogiyogi/>
大阪府吹田市千里山東 1-17-41 Tel/Fax：06-6210-4008

◆「革命の侍ーチェ・ゲバラの下で戦った日系二世フレディ前村の生涯」出版◆

マリー前村ウルタード／エクトル・ソラーレス前村 [著] 伊高浩昭 [監修] 松枝愛 [訳]
長崎出版 / 2009 年 8 月 31 日発行 / ¥2,000

◆グローバル・フェスタ 2009 ◆

10月3日(土)・4日(日) 10:00～17:00 日比谷公園にて
レコムも出展します。ぜひおいでください。

◆国際ふれあい広場 2009 in 高知◆

10月17日(土)・18日(日) 10:00～17:00 ひろめ市場(高知市)前スペースにて
グアテマラ生産者支援ネットワーク「みるば」が出店します。民芸品販売をします。

お知らせコーナーへの掲載メ切は、奇数月の10日となっています。掲載ご希望の方はお早めをお願いします。ブログ (<http://www.jca.apc.org/recom/>) でも情報を発信しています。

事務局短信

事務局が移行しました。事務局長は斎藤忍さん、連絡先はレコム梅村図書館の太田裕之さん宅です。電話はレコム専用ですが、留守電なので、必ず伝言を残してください。

こんにちは。始めまして。新事務局長の齋藤です。現在、会社員をしながら子育てもやっています（1歳、男の子）。今まで会計事務はやったことがないので、少々不安ですが、よろしくお願ひします。さて、きたる10月3、4日に日比谷公園で行われるグローバルフェスタにレコムは今年も出展します。会員みなさんがバトンリレーでグアテマラから運んでいる民芸品を販売します。プラス、代表の古谷さんが撮影したグアテマラの写真も展示します。是非遊びに来てください。売り子はこれまた会員ボランティアが行います。普段、顔をあわせることがない会員同士が「ああ、あの人だったのか」と思える機会になるかもしれません。（齋藤忍）

次回の『そんりさ』発送作業は 月 日（土）の予定です。
参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間です。

レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。
登録したい方は E-mail: recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

Vol.120	コロンビア 慢性化した紛争	Vol.116	メキシコ先住民農村は今
Vol.119	ナルコメヒコ メキシコの麻薬	Vol.115	コロンビア先住民族の共同体
Vol.118	エクアドル資源開発と先住民族	Vol.114	北海道先住民族サミット
Vol.117	エクアドルの先住民族活動家	Vol.113	サパティスタに魅せられた旅

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員みなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
☆会員 年 8000 円（学生 5000 円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出
☆賛助会員 年 10000 円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加
☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004
京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL&FAX 075-862-2556（留守電）
お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは
留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
65 万 4489 円
<グアテマラ基金>
17 万 0653 円
(2009年9月12日現在)